

自序



宇宙間是一大劇場。多心遊。

如業島。平生好求忠臣孝子。

事跡。借演劇可也。頃者讀

官律。殊多口法。潘閻及

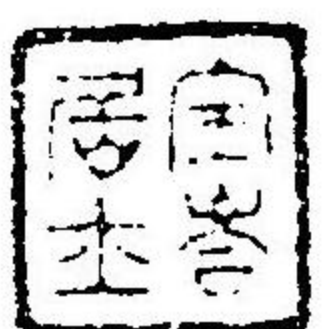
四行。包會。一美少年。在机前。

知子虛潔我輩中。此亦匪徒
告其實蹟。為說數刻。砲
聲。硝煙。恍如目睹。予於是
感慨情交格。恍惚不覺身
在夢境矣。俄而愕然見机

已。只有一冊子耳。乃就其
言再思之。事。實。不。遺。遂。前
後日誌。補採夢中語。作此
一冊。題曰夢日誌。其
勝。隴。不。分。明。者。是。夢。中

明治癸卯三月

河尻寶岑識



學海依田百川書







會津戰爭夢日誌

序幕 會津城外天満宮社内の場
同 鹽川筋堤の場

- 一 茶見世の亭主千助
- 一 神保阿園
- 一 消防組銀次
- 一 白虎隊井深茂太郎
- 一 敢死隊兵卒富吉
- 一同 梁瀬武治
- 一 會藩二股幸右衛門
- 一同 安達藤三郎
- 一 赤岡の娘阿竹
- 一 消防組 三人
- 一同 阿竹の妹阿蝶
- 一 敢死隊兵卒 二人

二幕目 清水峠官軍焚出し所の場
白河城官軍本營の場

- 一 焚出し方入足佐太郎
- 一 隊長高谷作二郎
- 一 實は會藩松山佐七郎
- 一 官軍兵士笠原源吉
- 一 役婦お牛
- 一同 お桑
- 一 參謀北垣大助

- 一同 お芭
- 一同 非淵正春
- 一同 お畑
- 一 焚出方役員 二人
- 一同 お米
- 一 焚出入足 八人
- 一 在郷娘おさよ
- 一 兵士 九人

三幕目 磐梯山麓庚申堂の場
同 裏道山間の場

猪苗代温泉蘆名屋の場

同返し 土田村佐吾七住家の場

- 一 城下の町人
- 一 太田の娘白菊
- 一同 白木屋喜左衛門
- 一 戸の口の名主
- 一同 娘おつき
- 一 青野忠平
- 一同 手代惣七
- 一 白虎隊安達藤三郎
- 一 米澤藩山口の娘初霜
- 一 會藩秋月新十郎
- 一同 山口の下女お定
- 一 安達下女お清
- 一同 若黨金助
- 一 百姓佐吾七
- 一 惡漢 久次
- 一 安達藤三郎の
- 一同 八藏
- 一 人足 二人
- 一 祖母 香樹

一 俠客熊倉の新五郎
一同 子分虎藏
一 會藩太田小兵衛

四幕目 戸口原戦争の場
同返し 會津城本丸の場

一 白虎隊井深茂太郎
一同 梁瀬武治
一同 十三人(姓名五幕)
一同 安達藤三郎
一 官軍の將澤村與七郎
一 會將小原右衛門
一 會將田代猶左衛門

五幕目 飯盛山中腹の場
同 麓辻堂の場
同 山中絶頂の場

一 白虎隊伊藤俊彦
一同 西川勝太郎
一同 篠田儀三郎
一同 津川喜代美
一同 野村豹四郎
一同 梁瀬勝三郎
一同 有賀鐵之助
一同 間瀬源七郎
一同 林八十治
一同 永瀬雄治
一同 鈴木源吉
一同 石田和助

一 會津大領
一 會津敢死隊 大勢
一 官軍 大勢
一 會兵 大勢
一 女隊 八人
一 會津近習 一人
一同 小姓 三人

六幕目 若松城火藥藏の場
城内太田邸の場
若松城北廓の場
同 城外山際の場

六幕目返し

太田小兵衛座補の場

一 百姓佐右衛門
一同 勘太
一 大工源太郎
一同 長藏
一 消防組卯之助
一 白木屋喜左衛門
一同 手代物七
一 俠客熊倉の新五郎
一同 子分の虎藏
一 會將田代猶左衛門
一同 太田小兵衛
一同 小原右衛門
一同 入江惣助
一 太田の妻葉末

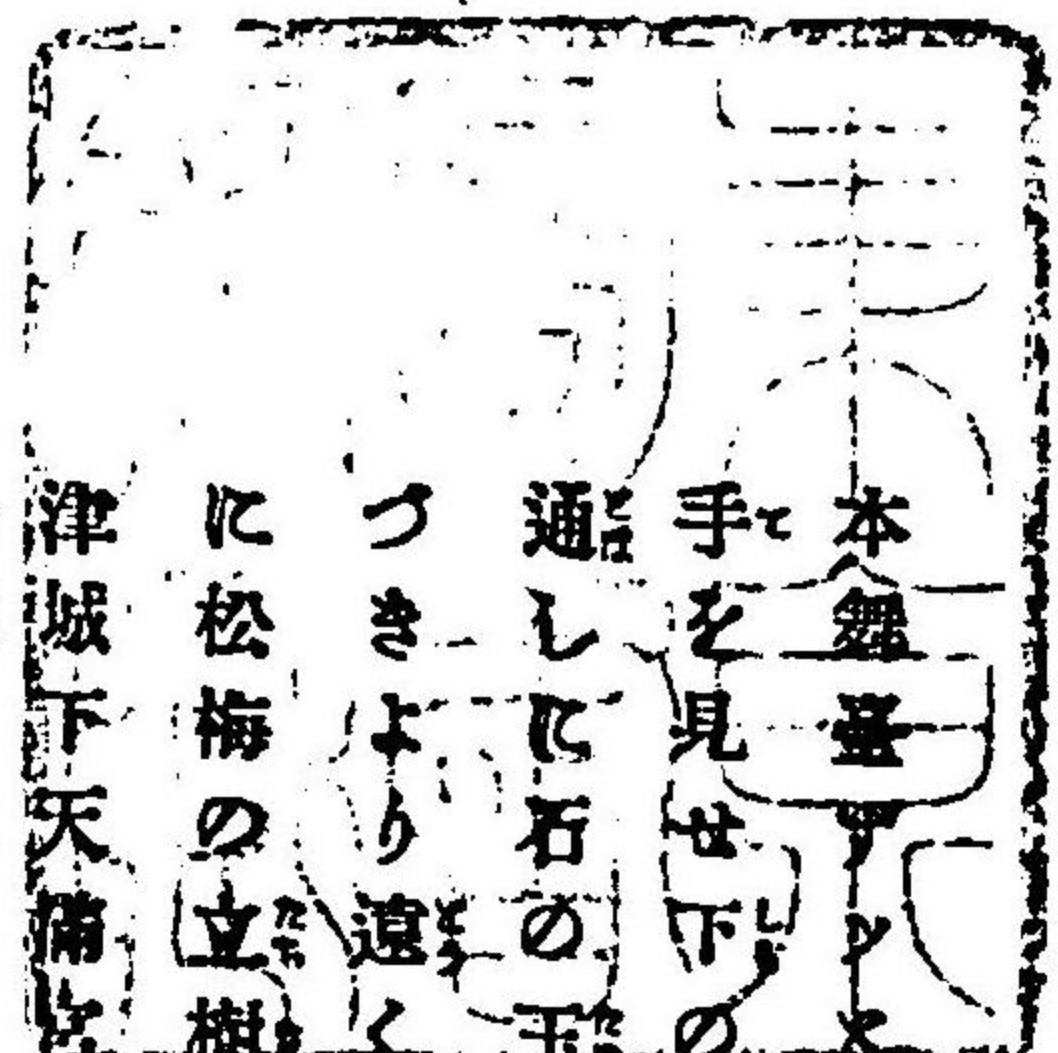
七幕目 若松城外並木の場

一 名主忠平
一 白木屋喜左衛門
一同 手代物七
一 百姓佐右衛門
一同 勘太
一 大工源太郎
一同 長藏

一 太田の娘白菊
一同 一子乙丸
一同 家來伊物次
一 女隊赤岡阿竹
一同 赤岡阿蝶
一同 神保阿圓
一 薩藩中村半次郎
一 會將時和次郎
一 參謀北垣大助
一 消防組 大勢
一 白木屋手代 二人
一 女隊 八人
一 官軍 大勢
一 會兵 大勢

會津戰爭夢日誌

序幕 會津城外天満宮社内の場
同 鹽川筋堤の場



本舞臺の上手へ寄せて天神の社の横
手を見せ下の方に茶店のかざりつけ正面
通して石の玉垣向ふ一面に町家の家根つ
つきより遠く山々を見たる書わり能き所
に松梅の立樹舞臺前床几二脚居を都て會
津城下天満宮社内のてい爰に消防組銀次
脊中に赤丸の中に會の字を出し襟に消防
組と印たる淺黄の法被に同じ色の股引草
鞋にて敢死隊の兵卒富吉の酒に酔たると

摺合て居る是を同じ打扮の消防組三人と
敢死隊の兵卒二人と支へて居る茶店の亭
主千助氣をもんで狼狽して居る後に通り
がりの仕出し大勢見物して居る此見え

ト支へて居る五人捨臺詞にて銀次富
吉の兩人を左右へ分ける

銀次 打捨て置て呉んねへ彼様な腰抜兵隊
は以後のみせしめだ叩き擲てやるのだ
富吉 腰抜とは何が腰抜だ

銀次 腰抜で有るめいか今備敵が畏ひと言
しやアがツたじやア無へか

富吉 いつ己が然いつた
銀次 たつた今言したアイ

富吉 あればナ備が餘り敵勢を侮るから道理を解て聞せたのだ

銀次 なんだ白あしみを言ひやアがるな備のやうな新参の兵隊に何が解るものか

富吉 コレ新参なんぞと失敬な事を言ふな平民から擲出に成た敢死隊のうでツこきだぞ小敵と見て侮る可からずとは孫子の軍法だ敵は名に應ふ大軍だから然う侮るわけのものでは無いと道理を言ッて聞せたのだ

銀次 其れが備の憶病と言ふのだ軍は人数の多少に由らぬことを知らぬへか富吉 なんの足風情の身を以て虚誇な事を言すな

銀次 なんだと人足だ篋棒め斯う見えても

只の人足とは違うぞ江戸から殿様の御供をして來た消防組だ備のやうな腰抜野郎とはわけがちがうぞ

富吉 ナニ又腰抜とぬかしたな

銀次 ナ、言ッた言ッたがどうした

富吉 あつた其の頬げたを
ト立かゝる兩人また摺合ふ餘の五人
捨臺詞にて是を支へながら此七人
下手へ這入るうしろの見物人皆々
捨臺詞にて器々いふて付て下手へ
這入る千助残り後を見送ッて

千助 軍騒ぎで人の氣が立て居るのでやゝともすると喧嘩を始めるにはイヤ困ッた

ものだ

ト大拍子になり向ふより會藩二股幸右衛門夏服割羽織袴大小草履にて出て來り直に本舞臺へ來る

コレハ二股様御參詣でムリ升かチトお掛遊ばし升

幸右衛門 ナ、千助かどうじや繁昌するかな

ト言ひながら上手の床几にかゝる
千助 イヤモウ世間の騒々しいのでさつぱりお客様はムリ升ねほんの店を明て居るといふ名計りでムリ升

ト言ひながら茶を汲で出す

幸右衛門 然うで有う、併し嘔て勝利に成た後は祝ひ酒の大騒ぎ此天滿宮の祭り

なども定めし華麗に出来るで有うは

千助 何卒早く然う致したいものでムリ升

幸右衛門 イヤ夫はさうとチト備に頼たい事が有るのじや

千助 何ぞ御用でムリ升か

幸右衛門 此書狀を城内の井深の邸迄届て呉れ

ト懐中より書狀を出して千助に渡す
千助 アノ井深様は只今何れへか御出張に成てお不在ではムリませぬか

幸右衛門 左様じや守之進殿は勢至堂の岩を預り彼の地へ出張致されて居るので其子息茂太郎に用が有るので此狀を届けて呉れば夫でよいのじや

千助 左様でムリ升か左様なら一ト走り往
て参じ升

幸右衛門 どうか急ひて往て来て呉れ

千助 畏り升てムリ升左様なら二股様一寸
往て参じ升

ト合方にて千助書状を持って向ふへは
いる

幸右衛門 まづ一方は是でよしどうか首尾能
くやりたひものじやナア

ト合方に成り下手より赤岡阿竹文金
島田夏服留袖衣装華美なる屋敷風
の打扮日傘を持出て来り上手へゆ
きすざる

ア、イヤ其處へムるは竹殿ではムら

ぬか

ト是にて阿竹ふりかへり見て

竹ヲ、何誰かど存ましたら貴方は二股幸
右衛門様少しも心付ませず失禮を致升
てムリ升

幸右衛門 どうも貴方のやうじやと思ひ升た
でマア、是へおかけなされ

竹コレハマア能い處で目にかゝり升た
チト伺ひたい事もムリ升るし左様なら
御免成されて下さりませ

トお竹下手の床几にかゝる
幸右衛門 イヤ平常ながら相變らず窺察なも
のでムるのう

竹何はともあれ幸右衛門様折入て妾が

伺ひ申たい事がムリ升る
幸右衛門 ナニ拙者へお尋とは

ト合方になり
竹外の事でもムリ升ぬが只今のお國の成
行容易ならざる御大事と妾は存升るが
貴方は何と思召升る

幸右衛門 是はまた改ツた其お尋ソリヤハヤ
大事と申せばいかにも大事然れども高
の知れたる烏合の勢何程の事がムラウ
ぞ併し勝敗は時の運万一事の破れとな
らば社稷と共に身を殉し一命捨るまで
の事マア箇様な事は男子の身に任ずる
どころ御身は婦女子の事で有ればさの
みお心を勞されぬが宜くムるて

竹ア、イヤお詞ではムリ升れど其思召が
妾にはどうも心に落入升ぬ

幸右衛門 ソリヤ又なせな
竹さればでムリ升る普天の下王土に非ざ
る處無ければ將軍家を始として當殿様
も皆王臣トサア女子の身として出さ
た事と思召でもムリ升うがお上を始め
お國の成行お案事申すゆゑの事臣下の
身として朝廷の軍に抵抗奉るを忠義の
道とは申され升まいなせ速かに歸順し
て國家の安泰万民の難義をお救ひ成さ
れませぬのか女子でさへも大義といふ
事少しは辨へ居り升るに其御評議の無
ひといふのが一圓合點が参り升ぬ

ト是を聞て幸右衛門は嘲笑ひて

幸右衛門 イヤナニお竹殿女義の御身では左様
様に思はるゝでもムらうがそも此度の
寄手といふは官軍といふは名を朝廷に
借たるもの其實薩長土三藩の謀議より
して出たる事

竹 縦ひ三家の所爲にもせよ今日天下の諸
侯等が朝命を奉じて向ふからは是朝廷
の御軍勢歸順を表し奉るに何憚る事が
ムリ升う

幸右衛門 コレサ／＼お竹殿其様に氣を揉
れな兎角其身を大切に煩はぬやうにし
てゐるがよいはさ其美しい容貌が有れ
ば縦ひ領主は變るとも又次の領主が來

て可愛がつて呉るでムらう心配せずと
落付てムレ

ト是にてお竹屹度なツて
竹 お戯言を伺がはふとて此お談事は致し
升ぬ女ながらも武士の娘主家の難を餘
所に見て他人の寵を頼むやうな妾では
ムリ升ぬぞ

幸右衛門 イヤコレハ／＼恐入た是は拙者が
わるうムツた必ずお腹を立られな御容
貌と言ひお心掛といひ實に立派なもの
イヤ恐入たものでムる○併し拙者は急
ぎの用事もムれば最早是にてお別れ申
ス

ト床几を離れ立上るお竹沈と考へて

居る幸右衛門じろりと見て

お竹どの其内お目にかゝるでムらう
ト合方にて幸右衛門嘲笑ひながら上
手へ遣入るお竹はやはり考へて居
る合方替つて下手より神保阿國丸
鬘髪屋敷風の打扮是と一處にお竹
の妹お蝶島田鬘屋敷風の打扮にて
出て來りお竹を見て

お竹様が爰にお出なされ升る
蝶姉上様是にお出なされ升たか

ト是にてお竹やう／＼顔を上げて
竹 誰かと思へばお園様にお蝶も御一處に
御參詣でムリ升るか

おハイ天神様へお願ひ申し味方の勝利を

祈り升うと

蝶お園様と御一處に

お園參り升てムリ升る
竹 それはマア能うお參りでムリ升た○幸
ひ往來の人もなしトお二人りに密々
でお話し申たい事がムリ升る

おナニ妾等に

お蝶おはなしとは
竹 マア是へおかけ成されて下さり升
お園は上手の床几お蝶は下手の床

几へお竹とならんでかける
さうして二人りへお咄しとは

ト合方きッぱりとなりお竹四方へ心

を付る事有て

竹兼々貴方等とお談示申升た只今のお國のなりゆき父に話しを致し升ても女子だてらに出過た事と只一口に叱られ升るし老臣の旁や男子に逢ふて話しても更に取合ふ人もなく今も今とて二股幸右衛門殿に逢ひ升た故大義を正し朝廷へ歸順の事をすゝめしなれど聞入ぬのみならず却て女子と侮つて嘲弄して立去しは時節を知らぬ愚昧な侍らひ那樣なもの相手にならねど匿々の旁でも所詮歸順の事は思ひも寄らず最此上は一死を以て君恩に報ひ升より外は無いと心に覺悟を極はめ升たが二人

りにはなんと思召升る

園ソリヤモウ我身とてもやはり御同意もと薩長のはからひより出たる事と思ふときは歸順の事にお心の無いのも無理では入り升ぬさはいへ此儘ゆくときは御家の滅亡目のあたり先祖以來の君恩を報じ升るは今此時女ながらも戰場へ戸を晒す覺悟に入り升る
兼年端のゆかぬ妾なれど忠義の爲に死するこゝろ

竹ヲ、夫でこそ妹じや感心し升又も園様のお心も我身の覺悟と一致すれば是よりお城へ立歸り檄文を作り夫々へ傳へ心ある女中を誘ひ一隊の女兵を組升た

なら聊か一方の御用にも立升うかと存

升が此事は如何にムリ升うな

園夫こそ素より望むところ共に力を盡し

升う

竹巴御前や範頼の勇には遙か劣るとも

園君の御爲國の爲

蝶命を捨る心はひとつ

竹同意の女中も大方は

ト指を折り考へて

ヲ、

ト頷くを道具替りの知らせ

四五十人は有うと思はれ升る

ト三人打合せる模様

時の鐘合方にて道具廻る

本舞臺通し高足の二重草土手所々に柳の立樹上下藪壘下手にだら／＼の上り口舞臺前一面の水布向ふ一面山々の遠見の書わり都て鹽川堤の躰

水の音にて道具とまる

ト本釣鐘を打込む水の音合方にて向

ふより白虎隊井深茂太郎前髪製後

茶筌割羽織袴大小草履にて陣笠を

手に持出て來り花道にて

茂太郎是迄參る道々に門戸を閉し民家の多

きは戦争につき餘所外へ立退しものな

らん常さへ淋しき鹽川堤ハテ寂寞たる

形勢じやナア

ト本舞臺へ來り土手の上へ上り

我に過急の用事有て是成る堪に待受る
とある幸右衛門殿より書状の趣き是に
委の見えざるはふくれしものと相見え
る是にて暫し待受ん

ト捨石に腰をかけて四邊を詠めて居
る上手の藪の後より以前の幸右衛
門出で來り

幸右衛門 茂太郎殿お早うムツた

茂太郎 幸右衛門殿只今お出でムツたか

幸右衛門 先刻より彼處にて貴殿のお出を

待申た

茂太郎 左様でムるか何はまかれ御書面の趣

きに取敢ず是迄參上致てムる

幸右衛門 早速のお越祝着にムる

茂太郎 シテ拙者へ御用の趣きは

幸右衛門 只今申演るでムらう

ト上手の捨石に腰をかける合方

イヤ茂太郎殿當藩中も多き中に御身と

我は又別段是迄水魚の交りなせば何事

に寄らず拙者には定めし御同意下さら

うな

茂太郎 改まつた其お詞貴殿はもとより貴殿

の甥武治殿とは兄弟の交りを致す拙者

何しに不同意を唱へ升うや

幸右衛門 スリヤ愈々御同意でムるな

茂太郎 其御念には及び升ぬ

幸右衛門 夫にて拙者も満足でムる

ト懷中より密書を出して

此品は現在甥の武治にも打明けざる大
事の密書披見召れ

ト差出す茂太郎受取て讀下してハツ

ト驚き

茂太郎 コリヤコ 大垣藩より城内の機密を

探る此文てい當名は正しく

ト幸右衛門へ思入れ

幸右衛門 嘸驚きでムらうがもと某は大垣藩

若氣の至りに人をあやめ國を立退き所

所方々浪々なして居るうちに壬生浪士

の隊に加はり伏見戦争の其折に甥武治

が縁により當會津の家臣となりしが斯

く四面に敵をうけては所詮免れぬ若松

城爰で命を捨やうより一ト度古主へ歸

參して立身するが此身の徳と大垣隊へ
機密を告げ内應なさんと思へども何を

言ふにも一人にては大事を行ふ事難く

年若なれど御身が穎敏味方に頼まん其

爲に此處まで呼出し申た首尾能くゆけ

ば互ひの出世かく打明かす上からは御

同意あるか但しは不服か此場では返答承

はりた

ト刀にそりをうたせて屹度なる茂太

郎莞爾笑ツて

茂太郎 淺果にも巧まれしな大義に基き歸順

せよと誘むる事なら兎も角も卑怯にも

敵に降り君家に誓なす不忠不義此茂太

郎の心は金銀かゝる巧みに與す可きや

幸右衛門 サ、其歸順を誘めてゆく事なら疾にも論を起さんなれど一徹頑固の會津武士イヤ中々思ひも寄らぬ事然りとして此儘長びくときは國內は言ふに及ばず奥羽一般の人民を長く塗炭に陥入ねば相ならぬ所詮保たぬ若松城一刻も早く落去させるが天下の爲め人民の爲めこの道理を了解して同意召るが爲めでんぞ

茂太郎 イ、ヤ縦ひ大軍寄せればとて勝負は時の運にして豫じり期す可きにあらず万一事の破れとなるも是天命の歸する所其期に至らば城と共に斃れて後に止む迄の事何恐るゝ事はムらぬ

幸右衛門 然らば御身は此度の戦ひ見事勝利を得らるゝ所存か

茂太郎 夫こそは天運次第然れども東は勢至堂峠を限り北は石籠寶城峠南は五十里越を境として夫より内へ敵勢を一歩も入れざる味方の決心西國勢を退崩し會津の武勇を示す所存

幸右衛門 いかにか若輩なればとて夫ぞ世にいふ猪の獅子武者あんまり先が見えぬとひて見るが宜ひ一旦取得し白河城も忽ち敵に奪ひかへされ棚倉平三春も共に皆官軍の有となり續で二本松も陥れば至る處は皆敵勢奥羽同盟の諸藩と言へ

と追々歸順の色を顯し今は孤城の此若松袋の鼠網の魚滅亡なすは早且夕日頃の因に某が御身を誘ふはすなはち寸志是でも會得が參らぬかな

茂太郎 義に因て一命捨るは武門の習ひ珍らしからず不義の富貴は望にムらぬ

幸右衛門 一ト通りは左もあらんが利害得失を悟らざれば眞の武士とは申されぬぞ

茂太郎 利害得失に詞を飾り縦ひ百方誘ふどもいッかな心は變じ申さぬ

幸右衛門 スリヤ是程に申ても

茂太郎 重ねて進めは無用に召れ

幸右衛門 ハテ是非に及ばぬ大事を明かせし其上にて承引無れば早是迄可憐ながら

生ては世れぬ

茂太郎 我とても亦君家の警御身の一命申受る

幸右衛門 若輩ものが猪口才な備が手練は知れてあれど志しが可憐なれば尋常の勝負致してやらう仕度いたせ

ト拾石を離れて立上る

茂太郎 心得た

ト密書を投捨手早く抜打に幸右衛門の腰の關節を切付る幸右衛門不意を打れてワット倒れ刀に手をかけ起上らうとする茂太郎疊かけて又一刀激せる幸右衛門苦しんで倒れる茂太郎走せ寄て止めを刺し宜し

く有て
一刀流の奥義を極めし天晴手練の幸右
衛門やす／＼我手にかゝりしも不忠不
義の是天罰思へば惜しき

ト幸右衛門の手練を惜む思入有て氣
をかへて刀を鞘に治め

此儘置くも本意ならねど大事の前の小
事なり〇ム、事の次第を隊長まで密々
に届け置ん

ト獨り鎮ひて立上る水の音にて悠々
と下手の下り口より花道にかゝる
上手の奥より白虎隊梁瀬武治同じ
様なる好の打扮にて出で來り

武治 茂太郎待た

ト是にて茂太郎ふりかへり

茂太郎さてとは誰じや

武治 人を殺害て其儘に立退んとは卑怯で
有う

茂太郎然いふは梁瀬武治殿

ト茂太郎つか／＼と舞臺へ戻り

此場の様子御存知か

武治 只今是へ参りかゝり御身の手練拜見
致した

茂太郎シテ拙者を呼止められしは

武治 現在叔父を討れし相手此儘には見免
されぬ敵と名乗て勝負召れ

ト是にて茂太郎思入有て

茂太郎忠孝厚き武治どの〇御尤も至極

ト其儘に座を占て

サアお討なさひ

武治 なんと言はるゝ

茂太郎私の口論より止を得ずかく刃傷に及
びしなり早く拙者が首打て幸右衛門殿
へ手向けられよ

武治 ム、ハ、ハ、ハ、若年なれど梁瀬武治死
人を切るも同様なる左様な察首は所望
でムらぬ立上ッて尋常に勝負なさひ

茂太郎一命惜むに非ざれども御身が恥ある
詞に任せ

ト茂太郎居まひを改め
然らば是にて雌雄を決し

武治 御身を討つか討たるゝか

茂太郎互ひの運を天に任せて

武治 義心を貫く果し合ひ

茂太郎此場で勝負を

兩人決し申さう

ト詠への鳴ものに成り兩人抜き合せ
て立廻り宜敷有る能き時分向ふよ
り白虎隊安達藤三郎同じ様なる好
の打扮にて出て來り此ていを見て

直に本舞臺へ來て此中へ這入り宜
敷止めて屹度なり

藤三郎二人りどもにも待なさひ

茂太郎止み難き所以有ての事

武治 委細は後にてお話し申す

茂太郎暫く此場を

武治も退き下さひ

藤三郎イ、ヤ退き升ぬ一應仔細を聞かざる

うちは拙者は爰は退升ぬぞ

茂太郎然らばお話し申さんが只今は成る武

治殿の叔父二股幸右衛門殿と口論に及

び武門の意地に止を得ず是此如く殺害

致せし茂太郎

武治叔父の敵と知りながら此儘見のがす

謂れは無し

茂太郎兩人此場で果し合ひ

武治互ひの勝負を決し申せば

茂太郎止めずとそこを

武治も退き下さひ

藤三郎然う聞く上は尙以て此場の勝負は相

成升ぬ○常思慮深き茂太郎殿斯る所行

に及ばれしは定めし子細の有る事なら

ん其義は後に承はらんが只今拙者申

事がムるまづ暫くお控へなさい

藤三郎真中の捨石に腰をかける茂

太郎武治は抜刀のまゝ左右に控へ

兩名能くお聞なさい

ト脱への合方に成り

當今の國のなりゆき御身等素より知る

ところ國境の四面は諸藩の大軍若を築

き壘を固め今にも撃て出べき結構然る

に我は若松手さりの人数を分ち多勢に

あたる味方の苦戦すでに民間より招集

兩手をつき

茂太郎ハ、人を殺害し義理に引かされ忠義

に捨る命をば私に捨んとせしは拙者が

誤り

武治私の警討に心はやり味方の勇士を失

はんとせし重々の趣忽

茂太郎藤三郎殿の意見にて始て夢の覺たる

こゝち

武治恐入て

兩人ムり升る

藤三郎スリヤ拙者が詞御了解なされたか

茂太郎いかにも○武治殿には拙者が一命誓

時拙者にお預け下され違からぬ内戦場

にて討死致せば其時に今の恨みをお晴

なし敢死隊の編制ありしも一人たりと

も味方の人数の欲しき折から御身等一

箇の義を重んじ君家の大事は思はれぬ

か

武治

藤三郎か計りの事辨へなき御身等にては非

れども差當つたる武門の意地に思ひ感

はれしものならん兩虎雄雌を争ふとき

は何れ一箇は死するの道理其死する命

をば戦場にはなせ捨られぬ

兩人サア

藤三郎忠義の二字を忘却されたか

ト屹度いふ兩人互ひに顔見合せ領き

合いて刀を鞘に治め藤三郎の前に

し下され

武治 敵といひしも武門の意地御身へ對して
意恨はムらぬ是迄通り水魚の交り互
に主家へ盡すでムらう

藤三郎 夫にて拙者も悦ばしうムる

武治 フツト足もとの密書に目をつ
け手に取て讀事有て

武治 フツ扱は是故

藤三郎 なんでムるな

武治 イエナニ

トもぢくする

茂太郎 役にも立ぬ反古でムらう

藤三郎 も見せなさい

ト密書を受取て讀み下す

武治 案外なる叔父が不所存

藤三郎 ア、イヤ

ト藤三郎 密書をずんく引裂て成
程是は

ト是を木のかしら

反古でムつた

ト藤三郎は茂太郎を感心することなし

武治は茂太郎に面目なき思入此も

やう

水の音合方にて幕

二幕目

清水峠官軍焚出し所の場
白河城官軍本營の場

本舞臺正面二間板屋根の堀立丸木の柱此
向ふ板羽目上の方竹矢來爰へ大なる水桶
を居る下の方一面に竹矢來此向ふすべて
岩山の張もの爰に大釜を居る火を焚て有
る上手より正面へかけて米俵味噌樽澤庵
樽梅干樽竹の皮等澤山に積重ねすべて官
軍焚出し處のてい爰に正面の假屋の中に
焚出し方の役人二人龜末なる筒袖の陣羽
織小袴にて床几にかゝり帳簿を調べて居
る舞臺前へ籠を敷役婦お牛お桑お芭お畑
の四人中年間田舎女房の打扮在郷娘およ
ね島田鶴何れも襦袢垂掛そばへ飯櫃樽の
類を置て竹の皮へ辨當を結めて居る下手
へ長持を二棹置て人足八人筒袖の半天股

引にて辨當を長持へつめて居る人足佐太
郎同じ打扮にて釜の下を焚て居る下手に
兵卒二人立かゝり居る此見え山あるし合
方にて

幕明く

ト昔く捨臺詞にて長持へ辨當を詰
る事有て

人足 サアく出來たぞく是へ今度はど

けへ持てゆくだな

兵士 何にしる勢至堂の峠下へ早くまはし

て呉れ

△ 腹が減ちやア働らけねへから

□ 役人 其長持へは幾箇遣入たな

○ 人足 へいこちらの方は二百八十ばかり道

入やした

氣味がわるいや

○役人 然らば夫を勢至堂下へまはしてやれ

○人足 弱へ事をいふな早くゆけ

○人足 畏りやしたサア〜我等二三人では

○人足 焚出し人足も錢にヤアなるが是が

へ勢至堂下へまはすだ〜

ツかねヘナア

○人足 ちツと承知だ

ト山あろしにて

ト一ツの長持へ擔い棒を通しながら

擔ひ兵卒一人付て下手へ遣入る殘

今勢至堂下は軍だんべいナア

りの人足又一ツの長持へ辨當をつ

○兵士 今戦ッて居る最中だ

めて

○人足 そいつは危へもんだ鎌砲玉が飛で來

○人足 今度は是へどけへやり升な

べいナア

○役人 夫はいくつは入たな

○人足 あたりへよ軍アして居るだもの

○人足 へい二百五十程遣入やした

○人足 其様だ事を恐ろしがッて焚出し人足

○役人 夫はナア本陣へまはせ

がなるもんけへ

○人足 畏りやしたサア今度は是へ本陣へ廻

○人足 ナアニ恐ろしい事もねへが些ばかり

すだ軍場でねへから安心だぞ

○人足 おれなんぞは軍場だッてちツかねへ

備一番先へゆくが能ひや

事があるもんか

○人足 夫じやア明日も亦軍があるのか

○人足 そんな事を言て鎌砲の音がすると一

佐太郎今度は白川からも御人数が來て總責

邊先へ逃るくせに

になるといふのだ明日の軍で勢至堂は

○何のふれが逃るもんけへ

多分落るだらうよ

○いつでも備逃るじやアねへか

○ 些と氣味がわるいな

○いつおれが逃たいつ逃た

佐太郎それ見た事か弱い事をいふくせに

○逃たから逃たといふのだ一昨日も逃

お半もし〜是でもう手が明き升たがめ

た

とがあるなら早く出して下せいよ

○何逃るもんかなにを己れ

○ よし〜まづ一時是でよいから一同

ト双方立かゝる此時佐太郎前へ出て

○ 暫時休息をするが能い

○ 佐太郎コレサ〜喧嘩をしてはいけなひは

○ 夫じやア是へ御本陣へ廻さうぜ

マア然らうつよい事をいふなら明日は勢

○ 合點だ〜

至堂を總責にするのだといふ事だから

ト長持を擔ッて人足五人兵卒付て下

手の奥へ這入る

役人 我々も一ト廻り見廻ッて参らう

左様いたさう

女共も休足いたせ長遊びをしてはな

らぬぞ

ト役人二人下手の奥へ這入る

牛こちとらも此内にいづもの見晴らしで

辨當をたべやうじやないか

桑それが能い

色大部も腹が減て来たよ

如辨當は一處にしておいらが持てゆくよ

米お湯の薬鐘を提てゆかう

牛ほんとに此子は氣がきいてるよ

ト音く立て辨當を持薬鐘を提て役

婦五人上手へ這入る佐太郎のこる

佐太郎ヤンくまづ一ト立片付た己一人り

残してみんな往て仕舞おつた○チ、釜

の下の火がまだ點て居るはドレ一べん

消して置るか

ト佐太郎釜の下の火を消て居る合方

に成り向ふより在郷娘おさよ島田

養田舎娘好の打扮にて出て來り花

道にて一寸領ひてす々に本舞臺へ

來り

もし一寸お尋申升

佐太郎アイどなたでムリ升

トふりむひて兩人顔を見合て

さよ、佐七郎さんか

佐太郎ア、コレ

ト押へて兩人四邊へ思入有て

マアどうして爰へ來たのだへ

さよ、あんらアお前様に逢てへから佐太郎

と云ふ名を知つてるので夫を言ッて逢

に來やした

佐太郎コレあれほど言ひ付けて置たのに態

々爰へ來るといふ事が有るものか然し

て切手も無くつてどうして門を這入て

來た

さよ、佐太郎さんに用が有るといふたら門

に居た兵士の衆が爰をつういと往て夫

から斯うまがッて又曲ッて聞て見いと

言はしヤツた

佐太郎能くマア夫で通られたマア何にしる

二三日内にはお前の宅へ往升からお前

が爰に居ては悪い早う去て呉れよ

さよ、あんらが居ちやアわるいのかねへ

佐太郎此間もあれほどいふたでは無いか爰

に居てはわるい○な○どうぞ爰は歸ッ

て呉れ

さよ、夫でもあんらア氣がもめる事が有る

から

佐太郎氣がもめるとはソリヤアどんな事だ

さよ、此焚出し所には女が大勢這入て居る

から夫が氣がもめてならぬへや

佐太郎ワハ、ハ、幾人女が這入て居やうと

お前を退けて外の女に手を出すやうな

吾儕では無ひそんな事は決して案事ぬ
が能ひ

夫ではアノ眞實にいひかへ

佐太郎能ひともく大丈夫じや○お前も知

つて居る通りいつぞや勢至堂のお陣屋

で二人りの中が露顯して吾儕は死罪に

なるところ井深様のお情で死ぬる命を

助つたも一つの御用に○此御用は大事

の御用じや夫だに寄つて今日はどうぞ

歸つて呉れ

トおさよ黙つて居る

ト恰どよい一寸待て呉れ

ト假屋の内へ遣入り手早く一通を認

めて持来りおさよに渡さうとして

又一寸考へて右の一通を懐中して
イヤお前に頼うと思つたが吾儕が自身

に出かけやう其時お前の宅へゆき升明

日の晝過ぎには急度ゆくからどこへもゆ

かずに待て居て呉れ

夫じやア急度来て下さるか

佐太郎往くともく決して嘘はつかぬ其時

緩り話し升ラノウ

夫では明日急度だよー

佐太郎八ツ頃迄には急度ゆき升

樂みにして待て居升よ

佐太郎其樂しみもけふが命の○ナニ命をか

けた大事の御用済した上で緩りと

そんなら己らばもう去ふ

トおさよ名殘惜さうに立上つて花道

つけざわに至る

佐太郎おさよ待ちや

トアイ

トふりかへる佐太郎沈とおさよの顔

を見て

佐太郎何にも知らずに

トエ

佐太郎ナニアノナニ何事もあしたの話しに

トそんなら必らず

佐太郎待て居てくれよ

トおさよふりかへりく向ふへ遣入

る佐太郎沈と見送つて

切なる心に絆されて跡先見ずの不了簡

飛だ事をして仕舞つたが思へば可憐な

女だナア

ト此時下手の奥より隊長高谷作二郎

陣羽織附太刀好の形にて出る跡よ

り兵士笠原源吉軍服にて跡より兵

卒六人附て出る

作二郎ソレ

ト兵卒六人バラく往て佐太郎に

かゝる佐太郎一寸擬潜つて屹度な

り

佐太郎皆様には吾儕をどう成され升

兵卒隊長の命令だ

ト神妙に廻にかゝれ

佐太郎ア、イヤ吾儕は何もお廻を受る覺え

はムリ升せぬ人違ひでムリ升う
源吉 其分疏は隊長の前で致せ
○兵卒 神妙にいたせ

ト又かゝるを一寸立廻つて双方を突
のけ

佐太郎罪の次第を承はらぬ其内は決して細
にはかゝり升ぬぞ

ト言ひながら懐中へ手を入れて以前
の密書を引裂く事有る

源吉 何も言はずなソレ

ト兵卒六人一度にかゝる佐太郎是を
相手に立廻りよろしく有る能きほ
どに源吉つかく〜と往て佐太郎に
組付き兩人立廻つてとゞ佐太郎を

組伏せて細を掛る作二郎は上手に
床几にかゝる兵卒細を取て佐太郎
を引居える

作二郎コレ佐太郎備會津の家來にして當
へ問者に入込し事明白なり尋常に白狀
いたせ

佐太郎吾儕は御存の通り白河在の百姓でム
り升中〜問者杯と左様な者ではムリ

升ぬ

作二郎見知り人を是へ呼べ

源吉 ハッ

ト源吉下手にむかひ

其者は〜引け
○兵卒 ハ、ア

ト下手より兵卒二人以前のあさよを
腰細にして引て出る

下に居れ

トあさよを下手へ引居える

佐太郎ヤ備は

トぎつくり思入れ

源吉 先刻軍門に來り佐太郎に逢たきよし
を申す願音は正して會津の詞わざと切
手の有無を答めず其儘通して様子を見
るに案に違はず會津の農民

○兵卒

只今一應問糺せし處會津在の農民に
て夫なる問者と夫婦の契約致し居るよ
し又是迄逢ひに参りし事一通り白狀
致してムりまする

作二郎佐太郎斯る證人が出ても備白狀致さ
ぬか

佐太郎存升ぬ終に見た事もなき其女吾儕は
一向に覺えムリ升ぬ

作二郎コリヤ女此者を存居るか

さよ ハイおんらが大事の

佐太郎ア、コレ見た事も無い婦人人違ひし
て滅多な事を言ふまいぞ

ト屹度いふあさよは悚懼して控へる

源吉つかく〜と傍へゆき

源吉 最早事明白なるに飽迄知らぬと言ひ
ぬけるは単法で有うぞ夫よりは尋常に
白狀なし上のお慈悲を願うが能ひは

佐太郎なんと仰られ升ても吾儕は覺えはム

り升ぬ

源吉 申さぬな能いは

ト源吉棒を取て佐太郎を轡上る佐太郎苦痛を堪えるもよ見るに堪えかねて

「ア、コレ、マア待て下さいまし」
「アノ眞實の名を言ひ升たら命は助けて下さい升か」

源吉 オ、白狀致さば隊長へ願つて命乞ひは致して遣はすは

「そんなら言ひ升此人は會津の御家來佐太郎またしても出すきた事控へて居れ」

ト総度いふ
源吉 エ、備は願つて居れ

作二郎ア、コレ、其者の懐中を改める

○兵

ト兵卒二人佐太郎の懐中を改め引裂たる密書を取り出し源吉にわたす源吉是を作二郎の前へ持ゆき段々

に繼ぎ合せて兩人して讀む事有て源吉 ナニ明朝未明白河の軍隊と一ト手に成り勢至堂物質の事治定致候素より手

海成る御陣所大軍一時に寄候時は所詮防戦は六ヶ敷忽ち時を乗越られ候事目前と存候早々御本城より御人數御増加これなくては雄々敷御大事と存候此段申入候也○ム、コリヤコレ勢至堂の密書へ願る密書の文言

作二郎 峠の岩へ屈けんと思ひ置たるものと

見える斯る證據の出る上は本人に白狀させるに及ばぬ早く成敗致して仕舞へ

源吉 畏つてムリ升るソレ引立イ
○兵

ト立かゝる

佐太郎 ア、イヤ暫くお待下され

源吉 待てとは何ぞ申事が有か

佐太郎 斯くなる上は今は何をか包み申さん
某事は會津藩にて身分も輕きも搦屋番
松山佐七郎と申者君恩の万が一を報
せんと問者と成て入込しもかく露顯の上は最早是迄今端にひとつの願ひが
ムリ升る

源吉 シテ其願ひは何事じや

佐七郎 何卒格別のお憐察を以て只今拙者に切腹を許し下さるやう偏に願奉り升る

ト是にて源吉は作二郎にむかひ
源吉 お聞の通りの彼が願ひ如何仕り升るや

や

作二郎 お搦屋番と有るからは扶持方も僅な事小身に有ながら斯る大事を勤る事天晴忠義一命助け得させたけれど法令は背き難し○彼が願ひ聞届け遣はす某是にて見分致さう

源吉 コレ佐七郎隊長のお許しあれば此場
に於て致すがよいぞ

佐七郎 願ひの趣も聞濟下され生前の本望有

難く存奉り升る

ト源吉傍へゆき佐太郎の繩を解く
佐七郎憚りながら小刀と紙一枚借用を願ひ

源吉 承知致した

ト源吉自分の帯せし小刀と懐紙を出
して佐七郎に渡す

佐七郎有難う存升る
源吉 隊長是にて御見分あれば心を静かに

立派にいたせ

佐七郎委細承知仕り升る
源吉 某介錯いたし還はさう

ト佐七郎座を占て肌を脱ぎ小刀をぬ

き放す

夫ではどうでも前様は助からない
のかねへ

佐七郎大事の役目を仕損ずれば死するは素
より覺悟の事じや

情無い事だナア
泣き落す

世二郎是成る密書を白川の本營に贈り明朝
物勢一度に押出し一舉にして責扱ん

佐七郎忠義は却て不忠となり御主君始め臣
下の人々嘸や此身を恨み給はん思へ

ト屹度眼を見張り無念の思入よろし
く有て氣をかへ

今は悔るも詮なき事〇イヤ見届け下
され

ト襟かき明けて刀を逆手にとりなほ
す

ア、もし

トあさよ其手に纏る佐七郎顔を見合
一寸わかれの氣味合有て退けど目

顔で促すあさよ取り付て居る佐七
郎思入有てあさよの手を振かへし

膝の下へ敷き其儘刀を左りの腹
へ突立るあさよ起上つてワツと泣

く佐七郎苦痛の仕打よろしく
佐七郎不忠の巨松山佐七郎我と我身を成敗
なし分疏仕るト刀を一文字に引まはす

源吉 オ、見事

ト是を道具かはりの知らせ
源吉刀をぬいてふりどる佐七郎苦
痛を忍ぶこなし此見え

山あろし合方にて

本舞臺三間の間中足の二重向ふ大紗綾形
の襖軒先へ菊の紋付し白張の幕平舞臺上

下柵欄に同じく幕を張りすべて白河城内
官軍本營のてい爰に二重の上に參謀北垣

大助惣髮鬘陣羽織小袴太刀を傍へ置き地
圖を見て居る平舞臺に兵士一人跪いて居

此見え時の太鼓にて

道具止る

兵士 明朝勢至堂物資の手筈一同の陣觸は如何仕り升うや

大助 少し考へて居る事が有るから陣觸は暫時控へるがよひ

兵士 然らば明朝の繰出しは御延引にムリ升るか

大助 イヤ延引といふわけでも無いがまだ少し考へが有るから何れ此方から申達さう

兵士 然らば御沙汰を申待申でムリ升う

大助 ム、さうだ然して陣々へも其事を申て置くがよひ

兵士 委細長つてムリ升

三十二

兵士 式禮して下手へ遣入る奥より參謀井淵正春同じ様なる打扮にて

太刀を提出て來り

正春 北垣氏只今清水峠から箇様な事を言て來升た

大助 敵の間者をとらへた趣ム、〇此一通は間者が所持して居つた品か〇イヤア

小刀細工をやり居るな

正春 北垣には夫をなんと見られたな

大助 拙者は死間と見たな此密書の趣は勢至堂へ贈る文では無い此方の味方に見せる爲に書たのだ

正春 拙者もさう見たて十分に人数を繰出させて白河城の空虚を覗つて裏からま

はつて火を放やうといふ策だ

大助 身分も輕ひも搦屋番で命を捨に入込だのは感心なやつでムるノウ

正春 腹を切らせたと言ふが能かつたナア

大助 無當人も満足したらう

正春 時に北垣是に付ていは無いが拙者が考へて居る事が有るのだて明日の物資は更に止めて事を易へて不意に出ると

いふ考へが有るのだ

大助 拙者もそれを考へて居るのだ夫故明日の陣觸を控へさせて置たが多分は同意だらう

正春 ム、夫じやア御身の考へから聞うか

大助 ム、言ふまづ拙者の見込は此近郷の城へ二本松迄落去した事だから是から順にやれば仙臺へ繰出すのだが爰が

少し方針の違ふ處だて仙臺米澤は言はば枝葉だ會津は根幹じや其根を絶つ時

は枝葉は随つて枯るの道理夫にまた若松は雪が早いじやて今三十日も過ると

必らず雪に成るスルト人馬の駈引が中々自由にはゆかぬだそんな事で日數を

追ふうち奥羽一圓連合されると容易に軍は果ぬはそこで思ふにはまづ仙臺へ

は兵を分つて賣かゝる勢ひを示し物資たいちに會津へかゝり二本松の境の賣

三十三

成峠から討入て知兵急に攻立るのが仕
事が早からうと考へるて

正春 ム、拙者の見込も其通りだ賛成峠は
會津第一の要害一夫之を守るときは万
夫も破る能はずといふ程の險岨だ夫を
頼んで彼處には守衛の兵も手薄といふ
事此口から攻入る時は直に猪苗代から
戸の口に至り其日の中に若松へ繰入る
事も容易だらうと策を決して居つたの
だ

大助 互ひの軍議が合する上は猶豫いたさ
ず陣觸なし
正春 明日は未明に二本松から物勢繰出す
手配り致さう

大助 其守らざる所を攻る必ず勝だ
正春 夫にしても清水峠でとらへた間者中

保科家にも忠臣が有るノウ
大助 其精神を朝廷へ盡したならば一廉の
ト是を木のかしら
惜しひものじやノウ
ト兩人氣味合風の音

合方にて幕

三幕目 磐梯山麓庚申堂の場
同 裏道山間の場
猫苗代温泉蘆名屋の場
同返し 土田村佐吾七住家の場

本舞臺四間前へ出して常足の二重岩山の
張りの上の方斜に古びたる庚申堂正面一
面岩山の張りの所々頃合なる松杉の立樹
すべて磐梯山下のてい爰に城下の町人白
木や喜左衛門旅形り娘あつぎ手代物七い
づれも旅形り物七は脊負葛籠をわきへ置
き野立をして居るてい下手に人足二人箆
笥の上へ風呂敷包を捆りつけたるを差擔
ひにして傍へ下し休息して居る此見え

山下し驛路の音馬士唄にて

幕明く

喜左衛門 あつぎは女の足で嘸草臥たて有う
モウ一ト息で温泉場へゆき升ぞ
つぎ まだ草臥は仕升ぬが女の足で運ひの

が昔さんにお氣の毒でムリ升
人足 お嬢さんは温泉場へ暫くも立退に成
るのでムリ升か

七 然ういふわけでも有り升ぬのさ温泉
の蘆名屋に御老母様が往てるのであ
目にかゝりにお出なさるのさ

人足 さうでムリ升か温泉場に居らッしや
れば御城下でどんな事が始つても大丈
夫でムリ升

人足 彼處は横道へ遁入升から御安心でム
り升嬢様も暫く彼處に居らッしやッた
ら宜しうムリ升う

喜左衛門 娘はどうしても逃無いと云て居升
のさ夫にアノ温泉場も實はまだ大丈夫

とも言へないから是から蘆名屋へ往て
主人と相談してどうかもう少し先の方
を見つけて置くつもりさうして斯様
な荷物は皆その方へ送つて置たいと思
ひ升よ

人足 ナアニ主公温泉場なら大底大丈夫で
ムリ升は

惣七 さうも言へないよ彼處は二本松へゆ
く往來筋だからねへ

人足 夫でも餘程横へ道入て居升は
喜左衛門 何にしる蘆名屋へ往ての事だドレ
そろくやり升うかな

惣七 夫が宜しうムリ升
つき 是からのぼりに成升かねへ

人足 此道はモウ始終ダラく登りてムリ
升が急な坂はムリ升んよ

人足 もう一息の御辛抱でムリ升
喜左衛門 サアやり升うか

ト慕明きの鳴ものに成り喜左衛門さ
きにおつき付て物七萬籠を背負人
足二人は箆笥を擔つて

○ 會津盤梯山は實の山よ笹に黄金が成
り下る

ト此歌を唄ひながら此人數皆く上
手へ道入る山おろし合方に成下手
の奥より米澤藩山口の娘初霜島田
襲に手拭を被り留袖形りの上へ合
羽を着て旅形り草履笠と杖を持出

る跡より召仕も定丸鬘鬘旅形り草
履跡より若黨金助割羽織一本指兩
掛を擔ぎ出て來りそこの捨石を
見て

金助 蘆名無草臥でムリ升う爰に頃合な
石がムリ升是へなと掛なされて少し
御休息を成され升

定 ほんに夫が宜うムリ升サア蘆名おか
け遊ばし升

トお定手拭にて塵を拂う初霜は正面
の石にかゝりお定金助は下手に懸
ひ

金助 米澤から御當地迄は大てい山でムリ
升から蘆名の馴れぬおみあしにはえら

ひ事でムリ升わへ
ト言ひながら火打にて煙草を吸付る

初霜 まだ此上にどのやうな難義な道が有
うとも羨しや厭ひはせぬわひノウ

金助 真心厚いお心から其お覺悟ゆる山道
も歩行なさると申もの實に感心致し
升る

定 夫はさうと盤梯山の麓の知縁の人と
やはは知れませぬかいナア

金助 どうも一向居處がわかり升ぬ斯うい
ふ事なら鹽川から直若松へ出たはうが
宜しうムリ升たが土地には馴れず此中
故と知縁の者む的にして餘程冗な道を
は歩行升てムリ升

ト山おろしにて上手より悪漢久次八

藏の兩人空駕を擔ぎ出て來り

久次 空手で歸るのでござへやすが何卒乗

ておくんない升

金助 マア駕は入らぬは

八藏 まだ御城下までは五里餘りムリ升か

らどうせお乗なさるのでムリ升う

久次 どのみち城下へ歸るのでムリ升から

お供をさせて下さい升

金助 温泉場へ参るのだから駕は入らぬは

久次 夫じやアどうでも乗らぬへのか

八藏 乗らぬへッて乗せずには置かねへの

だ

金助 女連れと侮ッて不禮を致すと許さぬ

ぞ

久次 許さなけりやアどうするのだ己れの

方から斯うしてやらア

ト兩人双方より金助にかゝる

金助 何を備が

ト一寸立廻ッて兩人を投る

久次 皆來ひ

ト是にて上手の奥より悪漢四人出て

棒竹鎗杯を持って一度に金助にかゝ

る金助刀をぬいて立廻りの内久次

八藏は上手のうしろへ隠れる金助

は悪漢二人に手を負せる二人下手

へ逃てゆく跡の二人と立廻りなが

ら金助も共に下手へ追入る初霜お

定は氣をもんで跡を見送り

初霜 コレ金助長追せず早う戻ッて來て

たもや

定 早うかへつて呉ればよひにナア

ト兩人下手を案事するうしろより久次

八藏出て双方より押へて

久次 止めたぞ

定初 アレへ

ト逃やうとするを兩人緊と押へつけ

る下手より以前の悪漢一人走り出

て

久次 ヤア手めへどうした

○悪漢の どうして中／＼手の利たやつで二人

りはやられさうだ己も危へから逃て來

た

久次 能ひ處へ來たてめへ此荷物を擔ひで

ゆけ

○合點だ

ト○は金助の兩掛を擔ぎ久次八藏は

逃る初霜も定を一人づゝ引立て此

人數皆／＼上手へは入る下手より

金助抜刀にて出て來り

金助 ヤア嬢様はどうなすつたお定殿もど

こへ往ッたか○どこへかお逃なされた

かもし悪漢にア、コリヤ案事られた事

だナア

ト頼りに氣をもんで居るうしろより

以前の悪漢一人竹槍を持伺い出で

のど見える○コレ旅の衆確然しなさい

コレ
ト屹度言ふを道具かはりの知らせ

旅の衆ヤ——イ

ト金助心付て眼を開く此模様

山あろしにて道具廻る

本舞臺向ふ一面の岩山所々杉の立樹物凄

き道具跳へあり爰に以前の初霜も定荒細

にて縛られて杉の樹に縛り付られて居る

久次八藏の兩人は煙草を吸て居る悪漢一

人は焚火をして居る

山下しにて道具止る

久次 あどの奴等はどうしたらう

○ 迎も叶はねへからやつつけられて仕

佐吉七コレ旅の衆コレ確然しなさい爰にも人が切られて

ト悪漢の死骸を見て

ヲ、箇奴は名代の悪ひやつ○旅の衆が悪漢に出合なすツて災難に逢はれたも

突然金助の脇腹を突く金助ワット倒れながら竹槍の先を切る悪漢其切られたまゝ又突出すを片手に押へて悪漢を一刀切る兩人一寸立廻ッてト悪漢を切り倒し金助も深手に弱りそこへどうとなる合方に成り上手より百姓佐吉七好の打扮にて出て来り此ていを見て駈寄て介抱して

舞たらしよ

八藏 手めへは餘程素早いやつだ○すばや

いと言やア早く遣付やうじやアねへか

久次 もうアノ奴は爰へ来る氣遣ひねへか

ら縛て有ツちやア甘味がねへ細を解て

遣らうじやアねへか

八藏 もう大丈夫だ細を解てやらう

久次 手めへそこで張番して居ろ

○ 己れか難義な役だナア

久次 後でどうせまはしてやるからマアそこで見張て居ろ

○ 備のいふ事だ仕方がねへ聞てやらう

久次 聞てやらう御大層な事を言ひやアが

らア

ト言ひながら初霜の細を解く

八藏 備そツちか狡猾ナア夫じやア已らア

此方だ

トあ定の細を解く

初霜 どうぞ堪忍して下さり升

定 どうぞ許して下さり升

久次 エ、黙て自由に成て居やアがれ

八藏 ぐずぐず言ふと打殺すぞ

ト双方にて手込めにしやうとする上

手の奥より俠客熊倉の新五郎割羽

織裁附大小草鞋にて出て来り此躰

を見てつか／＼とゆき久次八藏を

投退て初霜も定をかばひ屹度なる

○は新五郎を見て恟りして下手の

杉の蔭へ小さく成て居る

ト跡を見送ッて

思へましひやつらだ○女中等は飛だ目
に逢なさい升たどこも怪我はムリ
升ぬか

定 どこも怪我は致し升ぬ○どなた様か
能い處へ来て下さい升て

兩人有難うムリ升る

新五郎彼奴らは此街道で札付の悪ひ奴でム
リ升見かけ次第に吾儕が急度懲してや
り升さうして貴嬢等は御城内の御方で
ムリ升か

定 妾等は米澤の者でムリ升

新五郎米澤から此軍の騒ぎの中へ殊に女中
のお身で何の御用でお出なさいました

久次

ア、痛へくへく

八藏

投やアがツたナ

久次

仕事の邪魔を仕やアがると

八藏

其分には置ぬへぞ

新五郎

此賭漢も能く己の面を見やアがれ

久次

なんだ面を見ろどんな野郎か

八藏

見てやらうか

ト兩人新五郎を見て恟り

久次

ヤア熊倉の親分か

八藏

箇奴はたまらぬへ

ト兩人一度に逃出す○も一處に逃て

下手へは入る

新五郎ヤイ待て待たぬへか待ちアやがれ

のでムリ升へ

定 御城内の安達様へ用事が有て参り升

たものでムリ升

新五郎さうして鑑札を持ってお出なさい升か

一

定 其やうなものは持て居り升ぬが

新五郎鑑札が無くツちやア御城内へは遣入

れませぬぞ

定 夫はマアどうしたら宜うムリませう

新五郎御城下に知れた人でも有なさるなら

そこでどうかしてお貰ひなさいましマ

ア随分氣をつけてお出なさい升

トゆきかける

定 ア、もし今貴方にゆかれ升ては

初霜 妾等はどうも仕様がムリ升ぬ

新五郎さうしてマア女中ばかりで男のお連

は無ひのでムリ升かへ

初霜 供の男が居り升たが

定 大勢の悪漢に取巻れどこにどうして

居り升やら

新五郎夫は困なすツたのでムリ升ぬへ

定 もしあなた妾等を御城内へどうぞお

連成されて下さり升

新五郎吾儕も今御城内の急用で種々用をひ

かへて居升からどうもさういふわけに

は参り升ぬよ吾儕は是でお別れ申升

定 ア、もしマア待て下さい升

新五郎まだ用が有るのでムリ升か

定 妾等が米澤から遙々當地へ参り升た

其譚を聞成されて下さり升

新五郎夫を今吾儕が聞申たところがどう

も仕方がムリ升ぬねへ

定 さうでもムリ升うがマア聞成され

て下さり升此嬢様は米澤の御藩で山口

五太夫様といふ方のお嬢様で御城内

の安達様とは御幼少時からの許嫁

ト是にて初霜恥かしき仕打

思ひがけ無ひ今度の軍會津様の御藩中

は生死の程も計られず主公が戦場でも

しお討死でも遊ばさば共に命を捨やう

といふお嬢様のお覺悟で御両親のお許

しうけ遙々の道を妾等が供致してム

り升たのでムリ升る

新五郎夫じやア軍の有る中へ命をかけてお

嬢様は〇感心な事でムリ升ぬへ

定 此わけゆゑにお嬢様を御城内へお入

れ申やうどうか成されて下さり升

新五郎其安達様と仰しやるのは御城内でも

美男と噂の安達藤三郎様の事でムリ升

か

定 ハイ左様でムリ升

新五郎どうかして上てへものだが〇ムい能

ひ事が有升是から一里程戻ると土田村

といふ處に安達様の老母様が立退て

お出なさい升から兎もあれ其處へお出

成すつたらと言た處が道が知れ升まひ

筒奴は困つた事だナア

ト此時向ふばたゝにて新五郎の子

分虎藏尻端折にて走り出て直に本

舞臺へ来て

虎藏 親分こゝに居なすつたか

新五郎 虎藏何ぞ用か

虎藏 田代様が仰つしやるには親分に歸り

がけに鹽川の出張所へ寄て様子を聞て

来て呉ると言つかつて来やした

新五郎 ム、承知した〇備能ひ處へ来た此女

中おふたりを土田村の佐吾七の宅迄お

連れ申て呉れ

虎藏 お連れ申しやア夫でいひのか

新五郎 ヲ、送り届けて上りやアいひのだ〇

モシ是は吾儕の子分でムリ升からはを

お送らせ申升から決して御心配はムリ

升ぬ

初霜 そんならアノ母御様のお出の處へ

新五郎 ヘイ左様でムリ升

虎藏 爰に有る兩掛はお荷物でムリ升か

定 ハイ供の男が持て参り升たお嬢様の

お荷物でムリ升

新五郎 虎藏備擔いで往て上る

虎藏 承知しやした

定 何から何迄厚いお世話

初霜 お禮は詞に盡され升ぬ

新五郎 なんの御挨拶には及び升ぬ

虎藏 夫じやア御一處に参り升う

ト虎藏兩掛を肩に掛ける

新五郎少しも早くも出なさい升

初霜いろくも世話様になり升て

定 有難う存升る

新五郎夫じやア吾儕は是でも別れ申升

定 そんなら此方と御一處に

新五郎此男に付ても出なさい升夫じやア虎

藏

ト是を道具かはりの知らせ

頼んだぞ

虎藏 サアお出なさい升

ト虎藏さきに初霜と定は下手の奥へ

歩行新五郎見送る

此模様山あろし

驛路の音にて道具廻る

本舞臺三間の間常足の二重本庇本椽付向

ふ三尺の床の間に琴を立かけ三尺の茶壁

についでひて眺への襖上の方奥へ下げて一

間の續き道具障子を立て下の方瓦屋根附

の白壁の堀いつもの處枝折門此左右四ツ

目垣舞臺前飛石庭木のもやう宜しく都て

猪苗代温泉蘆名や奥座敷の林爰に二重の

上の方に會將太田小兵衛浴衣形り褥に座

し曲糸にもたれて居る下の方に娘白菊文

金島田振袖衣裳好の形りにて茶を煎れて

居る

ト白菊茶を煎れて茶碗に斟ぎ小兵衛

此見え合方にて道具止る

の前へ持ゆき

白菊 父上も茶をひとつ召上り升

小兵衛 テ、茶がはいったか茶と言ふものは

氣鬱を散じて至ッて能ひものじや長い

間の疵養生殆ど退屈致すわへ

白菊 夫でもおみわしは餘程お樂に成升た

やうにムリ升るナア

小兵衛 樂に成たともモウ大樂は全快じや踏

立ても痛も無し只筋を一本擧げられたの

で少し跛足に成たやうじやが此くらゐ

な事は仕方が無いは

白菊 骨へかゝり升ぬのが御高運でムリ升

た

小兵衛 然うだとも併し疵の癒るほど退屈を

覺えるて今日はまだ備の琴を聞かなん

だ何ぞ浚ッて聞かせて呉れ

白菊 毎日同じ様な未熟な調べも父上のお

氣晴らし夫では何ぞ浚い升うか

小兵衛 早うやッて聞かせて呉れ

白菊 畏り升た

ト白菊立上ッて床の間の琴を持來る

是より下座の欄吟に成り白菊琴を

調べる事よろしく能き時分下手よ

り名主青野忠平浴衣の上へ半天を

着て琴の音につれて聞ながら出て

來り枝折にもたれて聞惚て居る能

き程に小兵衛ふッて見て

小兵衛 其處へムッたは誰何でムるな

忠平 へい吾儕でムリ升

小兵衛湯場でお顔は見かけ升が貴方でムリ

升たか此方へお遣入り成され升

忠平 吾儕は戸の口の名主を勤て居り升る

青野忠平と申もの日々お嬢様のお琴に

は感心致升て今日もお琴の音につれ升

て花々お庭口迄上り升て眞に失禮を致

升た

小兵衛何のく其御挨拶に及ぶ事で〇サ、

御遠慮なくお遣入り成され

忠平 左様なら眞平御免下さり升

ト忠平切戸の内へは入り様先に腰を

掛け

お嬢様お止め成すッてはいけ升ぬどう

ぞあつとを聞かセ成すッて下さい升

白菊 未熟な藝でお耻かしらムリ升る

忠平 どう致升て其様な事を仰ッしやら

に何卒あつとを願ひ升

白菊 左様なら御免成されて下さり升

ト又獨吟に成り白菊琴を調べ終る

忠平 イヤ惜しい〇ワハ、イヤ面白う

ムリ升た實に恐人たものでムリ升

小兵衛シテ其許には何ぞお病氣でも有て御

入浴でムるかな

忠平 イエ病氣といふでもムリ升ぬ佐川様

の隊に付て運送方を致して居り升て僅

かな疵を受升たので養生に參ッて居り

升が此湯は疵にも不思議でムリ升

小兵衛夫では越後路へ出張してムツたのか
さうしてアノ新發田が變心した時分に
はお出でムツたか

忠平 へい居り升たともくあの時に疵を

受升たので彼時迄は面白ひやうに軍が

勝升てアアザんく進んで與板迄押出

し升て愈々あしたは惣進撃といふ處で

貴方新發田が裏切をし升て敵を松ヶ崎

から上陸させ小原新瀨を乗取られて仕

舞升て仕方なしに三條迄引上げ升た〇

トコロが敵は大軍で後から追ッて来る

佐川隊も山川隊も一ト手に成て加茂宿

迄引上げ升た時にはモウ村松も落城し

て仕舞升夫から途中では防戦が出来升

ぬ故國境の三月澤の時を越し升て小松
と石間の二ヶ所へ胸壁を築き其處で喰
止たのでムリ升

小兵衛、夫迄は承はり升た其後の模様は

お聞はムらぬか

忠平 其後は委しくは存升ぬが戦ひは度々

有る様子で其度毎に味方は勝利で敵も

攻あぐんで陣を拂ッて引下ッたと申事

でムリ升

小兵衛名に應う佐川山川の兩將軍にぬけめ

はムるまひて併し新發田の裏切さへ無

かつたら

忠平 イヤモウ十分の勝軍を彼事ばッかり

で散々にして仕舞升た

ト此時奥より湯場の女一人出て来り
女 お客様でムリ升

ト手札を出す小兵衛手に取て見て

小兵衛藤三郎殿が見えられた白菊お迎ひに

往て参れ

白菊 畏り升た

ト白菊は女とともに奥へ遣入る

忠平 お客様とあれば又後程伺ひ升う

小兵衛又緩々と話しにムれ

忠平 大きにおやかましうムリ升た

ト忠平は枝折の口より下手へ遣入る

合方に成り奥より白菊先に序幕の

安達藤三郎筒袖の制羽織袴好の形

りにて出て来る

小兵衛イヤ藤三郎殿サ、直とお前みなさひ
藤三郎然らば御死下され

ト藤三郎下手能き處へ居う

久々御不沙汰を仕升たが疵所は如何

でムリ升

小兵衛モウ大概全快し升た併し股の筋を断

て居升から本には成升ぬて

藤三郎お痛みはまだ有升か

小兵衛モウ痛みはトント直り升たから何時

でも働らけ升は

藤三郎夫は宜うムリ升たイヤ今日は貴殿の

お見舞を申て奥羽諸侯の模様をお話し

申度し外に又少しく見込の事もお話し

申度と思つて参り升た

小兵衛然うでムツたかシテ奥羽諸藩の模様
はどうですか
藤三郎どうも面白く無ひですてマアお聞下
さひ

ト合方に成り

庄内の一藩は如何にも金銀でムリ升が

後に秋田を控へて居れば逆も此方へ出

兵は出来升ぬ山形米澤其他の諸藩表に

同盟は唱へて居升が出兵の模様は更に

見えず事を兩端に寄せて居る様子逆も

頼みに成升ぬて

小兵衛然うして仙臺の内情はな

藤三郎仙臺には藩士に三好清房と言者が有

升て奥羽の同盟を拒み歸順の説を主張

したので藩中の議論二つに別れ一時は
沸騰致した様子併し抗戦の主義が盛ん
なので三好の議論は立ぬ様子でまづ頼
み有るは仙臺ですてなれども寄手の督

將九條副醜の兩脚が惣督府を津輕に置

てまづ仙臺を攻撃ん結構シテ見ると是

逆も此方へ出兵は六ヶしうムるて然す

れば若松は孤城と見ねば成升ぬて

小兵衛如何にも左様一身の外味方無しさ

藤三郎夫に付て拙者の見込と申のは二本松

の陥りし上は危ひのは寶城時でムるて

如何にも人数が手薄でムるからもし敵

勢に寄せられた時には逆も防戦は覺束

升ぬ彼處の守兵を十分に増加仕度と思

ひ升が貴殿の御意見はどうでムリ升な
小兵衛イヤ御尤も拙者も夫を思はぬではム
らぬが何をいふにも限り有る人数を以
て口々へ分配する事ゆゑ實に困難でム
るて

藤三郎其處ですて彼處は北辰隊の一手切り
ゆゑ何分危うムイ升て限り有る人数と
は申ながら我々の白虎隊なり又は人
民より組織したる敢死隊なり未だ何れ
の持口も定まり無ければ是等を以て實
成隊へ差向ければ往ぬ事は有るまいと
考へ升

小兵衛成程夫は御尤もな御論だ早速右の趣
意を参謀へお談事下さひ

藤三郎夫に付て拙者は若年の事どうか貴殿
の手書を頂戴して夫を以て参謀へ談事
升うと存て夫故今日参つたのでムリ升
小兵衛承知致した早速認めめてお渡し申さう
併し敵勢舉つて寄せられなば大軍に敵
血無し万一彼處が破れる時は中々の
苦戦になり升ふ

藤三郎勿論さ苦戦は素より覺悟の上です日
本中を敵に取ればどうで全勝の見込は
立升ぬ遅かれ早かれ斃れる事と拙者の
腹は極めて居升が太田氏どうです然う
では有升ぬか

小兵衛ム、然だイヤ感心く拙者の極意も
そこでムる〇時に藤三郎殿一献汲うか

藤三郎宜しひなも陪食しましやう

ト小兵衛手を拍つ奥より下女出て
御用でムリ升か

女 小兵衛酒を持って来て呉れ肴は何か見繕つて
な

女 畏り升てムリ升
小兵衛早く持て参れ

女 直と持て上り升
ト下女奥へ遣入る藤三郎床の間の琴
に目をつけ

藤三郎琴が有升な是は令嬢が成さるのです
か

小兵衛左様でムる退屈凌ぎに浚はせて居り
升て

藤三郎どうか一曲拜聴したひものですな
白菊お聞かせ申やうな琴ではムリ升ぬ
藤三郎イヤく能有る鷹は爪を藏すとやら
お葉まへが思はれ升るて

ト奥より下女酒肴の具を持出る
小兵衛よいく置いて参れく
白菊お酌は妾が仕升から置ても出成さい
升

女 左様なら宜しうお願ひ申升
ト下女奥へ遣入る小兵衛猪口を取上
て

小兵衛ドレ一どの毒味を致さうか
ト白菊酌をする小兵衛呑で
一どの献じ様

藤三郎頂戴致さう

ト藤三郎猪口を受けて香事有る

小兵衛酒は勇氣を増すもので少しは用ひて宜

いものでムるハ

藤三郎拙者も深くは用ひぬがひとつ二たつ

は味能く覺え升るて

小兵衛然らばもうひとつち重ね成され

藤三郎頂戴致さう

ト白菊酌をする藤三郎呑む事有る

小兵衛ア、能ひ心持だ、一、枝手折て筋にさ

せば本より窈窕たる若武者に合逢若木

の花葛

藤三郎イヤ面白抽者も何か

ト腰の矢立を出して懐紙へさら〜

と認めて

即吟です

ト差出す小兵衛手に取て讀下す

四面楚歌何至情、砲聲相雜馬嘶

聲、縦令鐵骨委鋒鏑、好抱忠

魂守會城

ト藤三郎節を付けて吟ずる

ム、イヤ感吟〜

ト粘にて傍への壁に張附けて

斯うして置くと後世千金の價だ

小兵衛アハ、ハ、ハ、

ト兩人奥に入る事宜しく早き合方に

なり向ふより會藩秋月新十郎軍服

にて走り出てすぐに本舞臺へ來て

新十郎太田氏一大事でムる

小兵衛ナニ一大事とは

新十郎今朝敵勢大軍にて寶成峠中山道と二

タ手に分つて攻撃なせしを兼て備へし

峠向ふの二ヶ所の砦に必死と防戦仕れ

ば未だ峠は持堪えては候得とも何を申

すも手薄の人数後詰の勢の無き時は所

詮峠は保ち難し早々人数を繰出し有る

やうち取斗ひ下さる可し

藤三郎ム、スリヤ早くも敵勢險阻を犯し寶

成峠へ押寄せしか

新十郎拙者は直に取てかへし尙も防戦仕ら

ん御免

ト往うとする

小兵衛ア、コレ待れよ意見がムる

新十郎シテ其許の御意見はな

小兵衛是より後詰を繰出すとも最早事の後

れでムる後詰の勢の至らぬうち必らず

峠は陥り申さんまッた彼處より此猪苗

代迄は道路狹隘にして備を立る事なら

ねば防戦なすべき地の理に非ず此上は

是非に及ばぬ一同戸の口原へ引上げて

彼處に於て食止るより外に施す手段は

ムらぬ御身は是より取てかへし味方の

ものにかくとつげ線引に引上られよ拙

者は直標本城に至り老臣等と軍議を定

め戸の口原の備を立ん心得られしか

新十郎太田氏の御意見御尤も至極是より直

早き合方にて幕

引付ると調練太鼓喇叭の音にてす
ぐに引返す

本舞臺三間の間中足の二重茅屋根の庇丸
木の椽側真中に筒切の沓脱ぎ向ふ佛檀戸
棚鼠壁上方奥へ下げて一間の續き屋躰
反古張の障子下の方一間葺下しの鼠壁に
三尺の入口細暖簾を下げ平舞臺下の方生
垣松の立樹此後田畑山〱の遠見の書割
平常の處に茅屋根附の片折戸上下生垣の
見切り都て百姓佐吾七住居のてい爰に二
重の上以前山〱の下女お定と安達の
下女お清島田鬚屋敷風の打拵にて初霜の
衣裳を疊んで居る此見え碓入りの合方に

に取てかへし仰の如く斗らひ申さん

藤三郎拙者時刻を量り見るに敵勢此地に來
る事は早やくて明朝卯の刻頃さすれば

戸の口の手配りは十分に調ひ升る

小兵衛いかにも左様まだ〱時〱さう容易
は越されまひ何にせよ新十郎殿には少

しも早く

新十郎猶豫はならず是より直に

小兵衛彼地の事は

ト是を木のかしら

お頼み申ぞ

新十郎御免

ト新十郎は逸散に向ふへはいる舞臺
の三人是を見送る此見え風の音

て

幕明く

清おなは嘸も草臥でムリ升う只今妾が

臺み升から然う成すつてお置成され升

定何致升て是からは暫時お世話に成升る

事何なりと御用をおさせ成されて下さ

り升

清夫はさうとお嬢様は始めてお見上げ申

升たが美しい事でムリ升ナア

定さうして主公は折々お出でムリ升かへ

清主公は白虎隊の大將分でお出成され升

故お閑が無いと見えてトントお出はム

り升ぬ夫故に御老母様も大ていお案事

成されてムリ升

定左様でムリ升か嬢様も那樣に思ひ思ふ

て山坂越へやう〱お出成された事少

しも早うお願ひが叶へて上たうムリ升

る

ト下手より百姓佐吾七徳利と重箱の

風呂敷包を持出て來り門口を遣入

り

佐吾七ハイ只今戻り升た

定ヲ、お歸りでムリ升たか然してアノ金

助殿の疵所はどうでムリ升たへ

佐吾七お醫者様の言はしやるには何分傷が

深い故どうか治療が届けば能いがマア

精々骨折て見やうと申され升たが藥の

故か今少し眠った様子でムリ升から其

儘寝さして参り升た

定 どうぞア全快すれば能うムリ升るナ

ア

佐吾七 清殿や御老母様の仰ッしやり付の

酒や肴を買うて來升たどうか能いやう

に調理して下さい

清 ハイ能うムんす夫は妾が調理升うわい

ナア

定 妾も助手を致升う

佐吾七 是はそちらへ渡し升るぞ

ト 徳利と風呂敷包をお清に渡す

清 アイ能うムんす

定 此お召は妾が持て参り升る

清 夫では仕掛にかゝり升う

定 御一處に参り升う

ト お定は衣類お清は酒と包を持て奥

へ遣入る佐吾七思入有て

佐吾七 ア、夢の世だナア以前己が安達様に

御奉公をして居た時から米澤の山口様

とお許嫁の有る事は知ッて居たが今此

軍の有る中を山坂越てムるとは可愛

らしいお志し世が世の時なら早速に御

祝言も有うもの主公は軍の御用でまだ

一回も此内へお顔もお見せ成さらぬ仕

義是を思へば御老母様のお胸の中が思

いやられてならぬわへ

ト 言ひながら沓脱の履物揃へて持て

下手の細暖簾の内へ遣入るすぐに

床の淨留理に成る

上 日足も頼て山の端に入る野の薄踏

分て心の奥は白萩の匂ひこぼるゝ一

入りの若武者此家をさして歩行來る

ト 向ふより前幕の藤三郎出て來り花

道にて

藤三郎 戸の口の事は太田氏が直様出張され

たれば此間にせめて餘所ながら

上 此世の名残惜まんと芝の扉にさし

かゝる

ト 藤三郎 門口へ來る是と一處に細暖

簾の内より佐吾七出て

上 佐吾七 目早く夫と見て

佐吾七 ア、主公か

藤三郎 佐吾七宅に居ッたか

佐吾七 サア、此方へお遣入り成され升

上 門の戸明けて請ずれば

ト 佐吾七 折戸を明る藤三郎内に入て

様先に腰をかけ草鞋の紐を解きな

がシ

藤三郎 何かと種々世話で有るノウ

佐吾七 何致升て行届き升ぬ事でムリ升イヤ

モウ毎日、お囀斗り申て居り升る

藤三郎 定めし然で有たらうよ

上 草鞋とくく、打通り

ト 藤三郎 草鞋を取り足を拂つて二重

へ上り

夙から参り度とは存て居ッたが軍務に

暇なく漸々の事で参ッたハ

佐吾七能くマアお出下さひ升た貴方の御無
事なお顔を見て此様な嬉しい事はムリ
升ぬモシ御老母様へ主公がお見え成さ
れ升た

上へ知らせる詞に奥の間より

香樹藤三郎が見えしとか其處へ往て逢ひ
升ら

上へ香樹は此方へ立出て

ト上手の障子の内より祖母香樹白髪
の切り髪帯附形り好の打扮にて出
て來り

藤三郎能う見え升たな

藤三郎老媽様にもお變りなく大慶至極に存

升る

ト香樹は上手の方に居ひ

香樹さうして御上には御機嫌能うおわた
り遊ばすかや

藤三郎上には本丸に御座在て御勇氣日頃
十倍し御健康に入らせられ升る

香樹夫はマア何よりの事シテ口々の戦ひ
は如何成る模様でムるぞや

藤三郎軍は毎戦味方の勝利老媽様お聞遊ば
せ

ト下座の合方

白河口の固めには横川井深の兩名勢至
堂の塔を守衛度々寄手を駈惱しまつた
越後口には山川佐川の兩隊にて會津川

を後に取り小松石間の兩所にて寄せ來
る敵を退崩せば敵も容易に進み得ず味
方の勢ひ盛んにしていッかな破るゝ氣
遣ひなし御心安く思召せ

香樹味方の勝利と聞くからは何よりもッ
て嬉しい事妾も安堵し升わいのッ

藤三郎遠からず内凱旋の吉左右お知らせ申
でムリ升ら

上へ口に勇めど心には早討死と覺悟の
身知らせたまはぬ痛はしやと涙呑込

む其所へ喉急走來る手代の物七
トバツ／＼にて向ふより前幕の物七

萬籠を背負走り出で直に本舞臺へ
來て門口に入り

惣七 佐吾七さんと仰ッしやるのは此方で
ムリ升か

佐吾七ハイ佐吾七は吾儕でムリ升が何處か
らムらしやツたへ

惣七 ハイ吾儕は城下の者でムリ升が猪苗
代の温泉へ参ッて居り升たので蘆名屋

の源藏殿から此方のお名を聞て参り升
た何卒暫く此萬籠を預ッて置て下さひ
升ア、息が断れる水を一どつ下さひ升

佐吾七ハイ

ト物七萬籠を襟先へ下す佐吾七水を
汲で出す物七其茶碗を取てぐいと
呑む

蘆名屋の源藏は懸意し升がさうして是

はどうしたわけでもり升

七 吾儕は城下の白木屋の若者でもり升が内の御老母さんが温泉場へ立退てムるに付て今日主公や嬢さんのお供をして参ッて居た處思ひがけ無い寶成時から敵がドット押込だといふ事

ト是にて藤三郎突胸思入

温泉場は亂騒ぎまた中へ敵が来たのではなひのでもり升が何れ来るには遊ひムり升ぬから吾儕は今一回引返して荷物を出して参り升からどうぞ暫く此萬籠を預ッて置て下さい升何れ後程又上り升御免なさい升
上へ言ひ捨たまゝ逸散に元來し道へと

引かへす

ト物七いッさんに向ふへ遣入る

上へ香樹は心も心ならず

香樹 寶成時が破れては容易ならざる味方の大事

藤三郎ア、イヤお氣遣ひ遊ばし升な縦ひ彼

口が破るゝとも猪苗代には太田氏が采配取て指揮されゝば忽ちの間に追かへ

し升ナアニ何程の事がムり升うや

香樹 太田小兵衛殿は温泉にて未だ負傷の癒ざる筈

藤三郎イヤ、最早回復致されて只今出張

され升た

香樹 ム、其なら備は彼時の破れた事を知

て居やるか

藤三郎いかに承知致して居り升

香樹 夫を知りつゝ安閑と此家に在ては成

るまいがな

藤三郎なんの猪苗代の敵は太田氏が引

受られゝば拙者は是より戸の口に至り

彼處の固めを致す手筈せめて一度今生

の〇イヤナニ今日少しの閑を得て物

語りに参りし仕義併しいつまで斯くて

も居られ升ぬば早申上する

上へ是が別れと藤三郎涙かくして立上

る老母は扱はと心に悟り

ト藤三郎愁ひを隠して立上る香樹扱

はといふ思入有て

香樹 ア、コレ藤三郎待ちや

藤三郎ハ、何ぞ御用にムり升るか

香樹 迎もゆくなら此老媽に今生の暇乞立

派にしてはなせゆかぬ

藤三郎ハッ

ト越起する

香樹 備や討死の覺悟で有うが

藤三郎何と仰ッしやる

香樹 寶成時は大事の要害彼の口が破れて

は忽ち大軍城下に込み入り岩々本城

と機脈を通ずる事叶はず一時に崩るゝ

味方の難義忠義の爲に討死するを未練

に悲しむ妾じやと思ふてか言を飾り偽

はるは却て不孝で有うがや

藤三郎スリヤ老媽様には拙者が胸中

香樹 七つの年から手露にかけ育て上げた

備のこゝろ知らひで何と仕升うぞ

上へ星を指たる一言に藤三郎は容を改

め

藤三郎恐入たる御賢察いかにも彼口破るゝ

上は戸の口原の關門にて暫時は防ぎ申

さんなれど諸藩の援兵頼みがたく孤城

を護る味方の苦戦討死なすより外なし

と決心致してムリ升る

香樹 能う打明けて申せしぞ夫でこそ眞の

武士死して後の名こそ惜けれ妾も嬉し

う思ひ升る

藤三郎七つの時より兩親に別れ此年月の御

養育御恩も送らず先立不孝御許し成さ

れて下さり升

香樹 イヤ、決して不孝に非ず夫が眞の

孝行なるぞ悴時衛夫婦の者も冥府に於

て無悦ばしう思うで有う我子に後れ又

孫を先立るのも定まる因果共に未來の

冥福は逆さまながら此老媽が祈るは老

の身の勤め後へ心を残さず立派に忠

義の名を上よ

藤三郎ハ、其詞を伺う上は今は心にかゝ

る事なし敵を引受花々敷一戦致すでム

り升う

香樹 ナ、勇まし、天晴武士心急きにも有

うけれど今が互ひの一世の別れ外に見

せるものも有れば盃して往升うぞ

藤三郎老媽様の仰せ畏ッてムリ升る

香樹 佐吾七盃の用意しや

上へ夫と目顔で知らすれば

佐吾七へ、畏り升てムリ升る

上へ心を悟ッて佐吾七は納戸へこそは

入りけり

ト佐吾七思入有て奥へは入る

香樹 今更いふも甲斐無けれど忠義一圖の

上の御身に賊の汚名を取り給ひ危急に

迫る今の御難義無御無念に在らせられ

ん御心中が思ひやられ升わいノウ

藤三郎罪無き旨を貫くと籠城なせしも武門

の意地素よりして朝廷へ敵對奉るの趣

意にはあらねど今と成ては引に引かれ

ず是非なき事にムリ升る

上へ二人りは顔を見合せて涙に濕る其

折から納戸の口より佐吾七お清銚子

盃持運ぶ

ト奥より佐吾七お清銚子盃を持出て

能き處へすえて二重の下手に居う

上へ此方の障子押明けて侍女のお定に

助けられ振袖姿盤かたち心ばかりは

花嫁の晴れの打扮もはれやらぬ雨の

中なる女郎花打萎れてぞ座になほる

ト上手の障子の内より前幕の初霜華

美なる好の打扮にて愁ひに沈みお

定に手をひかれて出て來り香樹の

側へ居う

上へ藤三郎は不審と見やり

此女中ハナ

香樹 覺えが有う米澤の山口氏の娘御初霜殿

藤三郎ヲ、眞に御身は初霜どの何して爰へ

香樹 先刻是へ見えられし子細は今度の國の戦争備と生死を共にせんと思ひ定めて來られし嫁女何卒此場で祝言の盃してやッて下され

藤三郎ソリヤ夫故にアノ初霜殿には

上へ流石岩木に非れば可憐の者と思へども

老媽様の仰なれど此祝言は致され升ぬ香樹 そりや又何故

藤三郎されば許嫁はあるにもせよ米澤侯は

同盟の諸侯の列に有ながら斯く大軍に圍まれたる若松城へ援兵を繰出さるゝ

様子も無きは何共以て心得ず底意知れざる米澤藩と婚姻は致され升ぬ

初霜 ソリヤ夫故に妾とは

定 盃はなり升せぬとか

藤三郎早々國へお歸り成され

上へ伶仃詞に初霜は

初霜 ハア

上へハット計りに泣き沈む老母は頷き座をすゝみ

香樹 米澤侯の思召は善か悪かも未だ知れずよし何れにせよ操を立る嫁女に何の咎が有う妾が許してさする盃何で備は拒むのじや

藤三郎何しに仰を拒み升うやナレ只今申

如く仕義に由ては若松の警敵とならんも計られず且は今死する命にて妻を娶りて何かせん夫故御辭退申上する

上へ道理をせめし眞人の詞初霜涙の顔をあげ

初霜

藤三郎様のお詞は御尤もともお道理とも申し様はムリ升せぬと國を出る時

父母の勘氣を受けて参りし此身

藤三郎何親御の勘氣を受られしとは

初霜 サア今も眞人の仰の通りもし米澤の

御前様がお心變るその時は會津様とは敵味方親子の縁を切てやれば山口家に

は因みもなし又義理もなし

上へ眞人に付くが女の道御老母様の其

外に親ありと思ふなど

厚き情の勘氣を受け山坂越て参りしもの此儘去られて戻り升たどどうマア國へ歸られ升う

上へ此世の縁は薄くとも

未來の縁を藤三郎様どうぞ許して下さり升せ

藤三郎夫程迄に五太夫殿にも

香樹 親御の義心嫁女が眞實なんと無足に

され升う妾が頼みじや此願ひ叶へてや
ツて下されいノウ

上「老母が慈悲心妻の貞操死を極めた
る其身にも恩と戀とにからまれ五
臟を絞る節無き思ひ弱る心を屬まし
て

藤三郎老媽様の仰と言ひ山口氏の厚意又初
霜殿の貞實は忝くは存ずれど心に染ぬ
縁遠ゆゑ

初霜 そんなら此身がふ心に叶はぬ故に
香樹 此盃はならぬと言やるか
藤三郎世に無き縁と明らかめて下され
上「切て放せし一言に初霜思案の胸を
定め

初霜 ナ、

上「懐劍すらりと振放せば老母は其手
を緊々と押へ

香樹 コレ思ひ迫ッて死する氣か
藤三郎狼狽た事致さるゝな

上「言はれて初霜涙ながら
初霜 お情厚き親良人の志しを徒にして
なんと命が捨られ升う縦ひ盃せぬとて
もどかごと迄藤三郎様の妻と思ふて
居り升る今は不用の此黒髪断て心の尼
法師衣の色を此儘に御老母様のお側に
居て妾しやお世話を致し升る未來の嫁
と思召お置成されて下さり升せ
上「あとは涙に伏沈む藤三郎は感じ入

り

藤三郎ハ、天晴貞烈其精神を見る上は如何
にも盃致すでムり升う

香樹 そんなら嫁女の願ひを叶へて
藤三郎世に無き我ど知りながら遙々暮ひ來
るといひ孝貞全き大丈夫の志しいかで
無足に致されやう

初霜 そんなら叶へて下さり升るか
藤三郎 未來永く變らぬ夫婦
初霜 嬉しうムり升る

トワツト泣伏す
香樹 其悦びが直に別れの
上「可憐さ可愛さ堰上る涙隠して
目出度祝言少しも早う

上「老母の詞に佐吾七も定も清も鏡子
どりくゝに那の世へ結ぶ婚姻の縁是
が別れと初霜が手に取り上る盃の中
にあふるゝ瀾然涙心は同じ藤三郎戀
と情の欄に思ひ亂るゝ花葛また來る
秋の頼みさへ天の河瀬の水増て逢ふ
が名残の三々九度力なくゝ汲かは
す

ト此文句の内盃事宜敷有てト、香樹
盃を治める
テ、目出度く是で妾が治り升る

清 お目出度と申さうか
定 斯な悲しひ
香樹 ア、コレ堅めの盃濟上は嫁女はソレ

定 ほんにさうでムリ升た些との間など
お嬢様では無ひもうし奥様チャツとお
側へお出成され升せ

上へ 突やられて娘氣のなんと詞もあら

しふく紅葉を顔に散しけり

トお定は初霜を藤三郎の側へ押やる

初霜 耻かしき仕打

上へ 藤三郎は詞を改め

藤三郎 今討死なす藤三郎を其人と慕ふ御身

がこころ忘れは置ぬ嬉しうムるぞ

初霜 其お詞が百年の命に換る身の賜もの

有難う存升る

藤三郎 薄き縁しも武士の家に生れし不幸ぞ

と思ひ明らか亡き後にて老媽様の御介

抱偏に頼むは初霜殿

初霜 仰無くとも嫁の役御老母様の御身の

お世話命にかけて致升る必らずお案事

遊ばし升るな

藤三郎 夫にて我も安堵致す

佐吉七 揃ひも揃ひしお二人り様せめて一日

半日でもお側にお出成されたら嬉しひ

事でムリ升うに

活 お目出度お盃が直に此世のお暇乞

定 御祝言は名のみにて此儘お別れ遊ば

すとは

佐吉七 是といふのも薩長めが斯な軍を起し

おッて此悲しみを見る事か

藤三郎 何悲しむ事が有う夫は忠義の爲に死

藤三郎 有爲轉變の

四人世の中じやナア

上へ 互ひに顔を見合せて涙に袖を絞り

けり颯と吹來る山風に遙かに響く砲

聲を藤三郎聞耳たて

ト遠く大砲の音する

藤三郎 遙かに聞ゆる砲聲は扱は敵勢猪苗代

へ早こみ入りしと覺えたり

香樹 思はぬ隙入り少しも早う

藤三郎 然らば老媽様御機嫌宜しう

上へ 是が別れと見換す顔兼て覺悟の初

霜が惜しや盛りりの黒髪を切て捨たる

尼法師

ト初霜懐劍にて髪を断て

し妻は貞操に誠を誓ふ武士の本懐弓矢

の譽れ是に過たる事が有うか今更歎く

は悪かな事じや

佐吉七 ナアニ歎きは致升ぬが吾儕は朽借く

ツてくなり升ぬは

藤三郎 其遺憾も無理ならねど二百年來連綿

と榮え給ひし將軍家さへ有るに甲斐な

き御形勢

香樹 さしも累代續きたる若松城も時至り

佐吉七 今御運の末なるか

藤三郎 我くの身は何程の艱苦を砥るも物

敷ならず

香樹 とはいふものゝ目の前に

初霜 かしれば繋がる此なりゆき

切筋もし

ト藤三郎に見せる

藤三郎

ト初霜の手を緊々握る

上ノ口にいはいはねど心と心互ひに通はす

暇乞

ト兩人よろしく有て

上ノ盡ぬ名残をふり捨て

何れもあさらば

上ノ思ひ切たる此世の別れ戸の口さし

て

ト藤三郎花道付際に至て急度向ふを

見るを木のかしら

藤三郎いッさんに向ふへは入る舞

森の音く見送ッて悲しむ

此模様風の音三重にて

幕

四幕目 戸口原戦争の場

同返し 會津城本丸の場

本舞臺小高き草土手此上所々松の立樹下
の方斜に比合なる石橋此下へ水布を敷き
向ふ一面原中の書割上下岩山の張も杉
の林都て戸口原十六橋の林爰に會津敢死
隊大勢官軍大勢と砲戦して居る

此見え寄せ太鼓砲聲にて

幕明く

ト敢死隊刀を抜て官軍の中へ切込む

ゴツチャの立廻り有て敢死隊皆々

上手へ逃て這入る官軍皆々是を退

て這入る 向ふより官軍大勢出て

石橋を渡り舞臺能き處に至る正面

の土手の後より白虎隊大勢半身出

して急に連發する官軍前の三人倒

れる白虎隊抜刀にて土手を乗り越

踊り出て官軍の中へ切り込む能き

時分後より白虎隊井深茂太郎梁瀬

武治手鎗を持出て此中へ這入り立

廻り有てト々皆く戦ひながら上

下へ別れて這入る茂太郎武治残り

上下より立戻ッて兩人顔を見合せ

茂太郎必死と成て働らけども目に餘る敵の

大勢 武治 新手を入替進撃なせば中くの苦戦

です

茂太郎隊長日向氏はどこへ行かれたらう

武治 先刻一と手の勢に向ひ退討して行れ

たが

茂太郎多勢の中にどりまかれて定めし是も

苦戦でムらう行衛を尋て助力し升う

武治 ム、行き升う

ト兩人下手へ行きかける下手の奥よ

り官兵四人抜刀にて出て兩人にか

ゝる一寸立廻り有て茂太郎は二人

の官兵と立廻りながら上手へはい

成り兩人烈しき立廻りよろしく有る能き時分

此道具二重廻しに成る

與七郎藤三郎は石橋と共に下手の奥へ消える正面の草土手逆に廻る

本舞臺草土手の續き道具誂へなり茂太郎武治の二人官軍大勢と立廻りながら道具治る

ト東西の花道より官兵五人ヅ、と會兵三人ヅ、立廻りながら出て本舞臺の皆くゴツチャに成り立廻り有て皆く上下へ別れては入る茂太郎武治官兵二人のこり雙方立廻つて官兵二人をしとめホツとな

る武治は二人の官兵と立廻りの内二人叶はず下手へ逃ては入る武治是を退て下手へゆきかける下手の奥より官軍の將澤村與七郎手鎗を持出て武治を押し戻す是より兩人立廻りの内上手より茂太郎出て加勢をする與七郎兩人を相手に烈しき立廻り有る下手の奥より安達藤三郎抜刀にて出て此中へ這入り與七郎に向つて屹度なる上下より官軍出て皆くゴツチャに成る茂太郎武治は官兵と戦ひながら上下へ別れては入る與七郎藤三郎残り雙方屹度なる是より誂への鳴ものに

る本釣鐘を打込む下手の奥より藤三郎出て

藤三郎兩名無事で居たか

茂太郎まづ一旦の敵は退崩したな

武治ア、中くゝゑらかつた併しさすがの大勢を退崩してヤツたのは能い心持だ

茂太郎今日の戦ひは偏に我隊の功績だ

藤三郎併し一旦は退くとも彼奴等は後詰が

續くから忽ち勢を盛りかへして進撃して來るのは必定だ

茂太郎戦ひ勞れた味方の人數後詰に續く勢も無く

武治 新手の敵を引受るのだから今日は我死するの時だ

藤三郎ム、さうだ是からが決死の戦争だ兩名堅然やらうぞ

茂太郎大丈夫だまだく

武治 幾等でもヤツつけるは

ト向ふ揚幕にて寄せ太鼓喇叭の音する

茂太郎早くも敵はもりかへし

武治 再び爰へ押て來おつたか

藤三郎白虎隊の必死の働らき敵の奴等に

ト是を木のかしら

見せてやらうか

ト三人意氣組で向ふを見込む

此見え寄せ太鼓喇叭の音にて

引付ると右の鳴ものにて直に引返す

本舞臺三間の間常足の二重黒塗の檜向ふ金襴上方一間の金襴下の方同斷都て城内本丸奥殿の躰爰に女隊八人結び髪筒袖形り陣羽織派出なる打拵にて居ならぶ

管絃にて幕明く

○女隊 今度赤岡お竹様は女の隊をお組成されスハト言ふ時一方の防ぎを爲んどの思し立

△△ 是迄受し君の御恩報じ升るは今此時

□□ 皆様方と申合せお竹様と一ト手に成

×× 女ながらも武士の家に生れし妾等

×× 縦ひ男子に及ばずとも一方の敵を引受

□□ 力の限り働ひて叶はぬ時はもろとも

○ 潔よく討死して日頃の御恩に報ゆる

△△ 覺悟

○ 今御城下は敵の大軍充滿して居ると

○ スハト言はれ討て出會津の女隊と末

の世に死して其名を

八人 残し升う

ト右の鳴ものにて上手の襖の内より

小原右衛門筒袖陣羽織小手腹巻小

袴提刀にて出て來り

右衛門イヤ勇ましき女中等敵に當つて一命

捨君恩に報せんとはイヤ感心仕る

○ お賞しのお詞恐入升てムり升る

右衛門婦女等迄が此様に城中心を一致すれ

ば縦ひ如何成る大軍なりとも何の恐る

ゝ事はムらぬアレ開かれよ那の如く日

々管絃を催して又風りを空に上せ餘暇

ある躰を寄せ手に示し城中勇氣は益々

盛ん心地よい事でムる

ト向ふより老臣田代猶左衛門軍服提

げ刀にて出て來り花道に居う

猶左衛門 右衛門殿には是に居られしか

右衛門 是は御老臣にはかけちがって御

意得升ぬまづ是へお進み成され

猶左衛門 然らば御免下され

ト猶左衛門本舞臺へ來り能き處に居

し申す

右衛門此程より軍務のお勞れさこそお察

猶左衛門 奥羽同盟の諸侯等は何れも頼む處

無く會津一手の勢を以て孤城を守る今

日の形勢是も天命是非がムらぬて

右衛門夫故却て城内の勇氣は愈増といふも

の

猶左衛門 今日拙者些上へ直々伺ひ度き事有

て參上致てムるが何卒お逢ひの義をお

願ひ下され

右衛門承知仕る早速御側衆迄申入升れば暫

く是にも控へ下され

ト右衛門立上ッて上手の襖の内へ遣入る

○ 御老臣には御城下の敵の様子も聞遊ばし升たか

猶左衛門 去れば戸口の戦い破れ敵勢城下へ込入しが只遠巻に陣を張り兵を治めて攻かいらず何か所存有ての事か未だ城下の戦ひは開き升ぬ

ト二重の上手より側役一人軍服にて出て来り

側役 上には只今此處へ出御にムリ升る

ト言ひ捨てもとの口へ遣入る
○ 御上のお出とあれば妾等はも次へ御

遠慮致升ら

△ 左様致し升ら

ト管絃にて女隊八人は猶左衛門と式禮して下手の奥へ遣入る二重の上手より小姓二人褥曲衆と刀懸を持出て能き處へ居えて遣入る正面の襖を一面に引ぬく

向ふ廣間の遠見
奥より會津大領羽織袴小刀を帯し凜然打拵にて出て来り褥の上へ座す後より小姓一人大領の刀を持出る

大領 備は次へ参れ
小姓 ハア

ト刀を刀懸へかけて小姓奥へ遣入る
大領 猶左衛門

猶左衛門 ハア

大領 此程よりの軍務の駆引辛勞さこそと察し入る

猶左衛門 御懇の御意有難く存奉り升る

大領 サ、もツと進め

猶左衛門 ハッ

ト猶左衛門席を進む

大領 何か自分へ申事有りとの事夫にて申聞よ

猶左衛門 直のお逢を願ひ升たる事別の義に

もムり升ぬ
ト管絃に成り

敵の大軍城下に迫り今にも討てかゝらん結搦ナレドモ味方は決死の精兵容易

には破るゝ事はこれ有るまじ去ながら軍は名義を以て第一となす事此度の籠城今日に及んでは名義に於て拙者聊か或う處無きに非ず上には如何思召や御賢慮伺ひ奉り升る

ト慎しんで言上する大領熱々聞たまひ沈と思入有て

大領 ム、左様か○備の所存は大義名分を明らかにせよと申のじやな

猶左衛門 御意の通りにムリ升る

大領 ム、分ツたコリヤ何じやな自分に自ら敵の軍門に出謝罪の實を表せよと進

むるので有うな

猶左衛門 恐入たる御賢察申すも憚り有る事ながら方今の場合止む事を得ず拙者が胸中逐一に言上致せし其上にて思召を伺はんと推参致してムリ升る

大領 備が心中聞かざる先に自分の所存を申聞さう近う進め

猶左衛門 ハッ

ト又席を進む大領四邊へ思入有て

大領 今斯く籠城に及びたる事の元を推時は偏に將軍家の御爲を思ひ奉りし故の事勿躰無くも將軍家へ賊の汚名を負はせ奉りしは彼三番の所爲にして怨み無きにはあらねども我が籠城と決せしは

全く彼等を敵視する謂には非ざまつた天下の大政も將軍自ら返上有りし事再び其職に在らせ奉らんとにも非ず只偏に御身に罪無き旨を朝廷へ貫き我が一身を犠牲となし將軍家の誠忠を明かにし御家相續成さしめんこと思ひしなれ然るに當年閏四月龜之助殿を以て御名蹟を立られ慶喜公にも駿府表へ御移り有て御家安泰なる上は我が本懐は既に達せり今は誰が爲にか籠城なさん素より朝廷へ對し敵對奉る謂れは無し然るに今日の籠城大義に戻り名分とても立難く末代賊の汚名を取る事自分に於ては無念にも思ふなれど今と成つては

仕方が無ひは猶左衛門自分の心中はかくの通りじや

猶左衛門 ハ、御心中承はり恐入り奉り升る拙者が所存も其外は無く恐ながら御同意にムリ升る左様の御賢慮ましまさば

憚り多き申事にはムリ升れど御自身の御一命に換させられ速かに開城有て人民塗炭の苦しみを救はせ賜ふやう願はしう存奉り升る

ト思ひ込で言上する大領涙を押へたまひ

大領 猶左衛門忝ひぞよ一命に換へ人民を救へよとは能く申て呉れた臣とは思はぬ手を実て禮を言ふぞよ○我とても疾

に心は付き居れど如何せん老臣始め多くの家來思ひ込だる忠義の一徹死を誓ての志しは所詮動かす可くも非ず今は何とも詮方なし家臣と共に斃るゝ迄と自分は決心致して居るのじや

猶左衛門 コハ勿躰無き思召其義なれば拙者身命にかへ論抗なし大義を貫き申でムリ升る

大領 イヤ、夫は徒な事じや爾百方論するとも誰か用ふるものあらんや却て害を引出さん無益な事じや止に致せ

猶左衛門 スリヤどう有ても御決心にて大領 爰に至ては是非が無ひわへ猶左衛門 其は然ながら今一應何卒御賢慮回

らされ

大領 備が言はずと是迄に自分も心と勞して居るは

猶左衛門 玉を懐ひて山に泣く思ひは同じお家のなりゆき

大領 祖先へ不孝民への不仁我が心中をト是を木のかしら

推量いたせ

猶左衛門 ハアツ
ト双方氣味合よろしく
下座の三重にて幕

五幕目 飯盛山中腹の場

八十二 同 麓辻堂の場

本舞臺一面の山幕爰に百姓七人竹笠に竹杖を持車三臺に兵糧米を積立かゝり居る

山下しにて幕明く

○ 倒々敵方が城下へ一杯押込で仕舞たが恐ろしい人数じやアねへか

△ よもや城下へ押込まれやうとは思はなかつたが餘り突然で魂消ちまつた

□ 戸の口原の軍が負たばツかり斯な事に成て仕舞た

× 此やうすじやアアノお城も何だか危ねへや

ねへもんだナア

○ 敵方の兵糧を斯して骨を折て運ぶのは氣のねへこんだ

□ お殿様を攻に來た敵の爲に使はれるとはなんたるこんだナア

○ ソリヤア誰だツて敵の爲に酷使れるのは悔しひけれど否だと言やア打切られて仕舞だんべい

△ 夫だから仕方なしに働ひてやるのだ

□ 少しでも劔術を知ツて居りやア敵の陰囊へでも喰付てやりてへけれど

○ 銀鍔の外には持た事のねへこちとら幾等言ツても仕方がねへ打切られちやアつまらねへから思へましひが使は

れてやるのだ

△ 何も精出すには及ばねへや休み〜緩々やらうよ

○ 然うだ〜其つもりで透進出かけべいか

△ おもいれ懈怠てやるだ〜

○ サア夫じやア透進ゆくべいよ

ト山下しにて此七人車を曳て上手へ遁入るあど床の淨瑠璃に成る

上へ爰は所も會津なる飯盛山の朝嵐雲路に迷ふ初雁の友呼ぶ聲も力無く哀れ色増秋の空

ト山下しにて山幕切て落す

何とも思はねへが腹が減て堪えられね
へや

篠田三郎 然だよ昨日の晝辨當を喰たぎり
終夜爰迄來たのだから腹はへこくだ
眞實に勞れきつちまつた

津川彦代美 併し昨日我くの一隊でアノ大
軍を退崩した時は能い心地だつたナア
野村四郎 何をいふにも向ふは大勢で新し
がずんく入替るから

梁瀬三郎 忽ちのうちに盛りかへして前後
を包んで攻立られ
有實之助 隊中の者も大底其處で斃れてし
まひ

間瀬源七郎 隊長の日向や原も何方に居るか

上の方に大なる岩の丸ものはより上手へ
登る道あり下の方岩石の下り坂所々松杉
の立樹向ふ山々より若松城を見たる遠見
の書わり平舞系下手に岩の間より瀧の落
て居るもやう都て飯盛山中腹のてい爰に
白虎隊十六人手負もありて飢に勞れたる
様子思ひく居ひ下手の瀧の流れに水
を呑で居るもあり

山下をかすめ小鼓のあしらひにて
道具治る

伊藤俊彦 那だへ西川傷は痛むか己のは幸ひ
薄手だから知れたものだがあまへは大
分歩行のが難義なやうだナア

四川勝三郎 孰の道死ぬ身軀だ負傷なんぞは

生死もわからず

林八十治 僅に残つた此十六人一生懸命切抜
て

永瀬雄治 命は惜くは無ひけれど城へ遁入て
守らうと

鈴木源吉 残念だつたが後を見せて漸々爰迄
落ちて來たのだ

石田和助 昨日から飯も喰はず一夜山の中を
歩行たから力も何もスツバリ抜ちまつ
た

飯沼貞吉 今爰で敵に出合たひには手も出せ
ず討れちまうんだ残念な事だナア
安達三郎 コレく其な弱ひ事を言ッちや
アいかんぜ昨日は所詮討死と覺悟極め

て居たのだが爰迄免れて來たからには
まだく是からやらかすのだ

井深五郎 夜は明たから道路は安し是から
直に閑道傳ひひとまづ城内へ遁入た上
味方の者と力を合せ

梁瀬武治 必死と成て防戦すればナアニまだ
まだ堪えるは今一度敵のやつらの新膽
をぬいてやるのだ

茂太郎もし天運が盡なけりやア大島氏の隊
を始め

武治 諸藩の援兵が繰出しやア夫こそ軍は
占つちまうは
梁三郎さう成る時には若松の威勢を天下へ
輝かすのだ名々モウ一と憤發だ弱ッち

やアいけねへソレ此山から若松は目の
下に見えて居るは

上へ勇むる詞に一同が遙か彼方を打望
めば

ト昔々後をむひて城の方を見込む此
時仕掛にて若松城の前の處ニク所
程火の手上る

上へ無漸や彼處は一圓に火焰盛んに燃
上り黒煙天に漲る形状

ヤ、城は煙りに包まれて火の手熾ん
に立上るは

茂太郎扱は敵勢城内へ早込入て火をかけた
か

武治 數ヶ所に起る焰の勢ひ

俊彦 朝日に輝くお櫓も

勝太郎煙りの中に覆はれて

藤三郎さすが名城と言はれたる

喜代美 若松城も爰に至り

豹四郎一時の火焰と成たるか

茂太郎 天運なりとは言ひながら

武治 只一日の事にして

藤三郎 早落城に及んだか

上へ忠義に凝たる若武者が無念の眼に

血をそそぎ拳を握り齒を咬緊誓し見

つめて居たりしが

ト皆く無念のこなし十分有て

上へ言ひ合さぬと一同が是迄なりと観
念なす

藤三郎もういかんく己は爰で割腹しちま

うは残念だが仕方が無ひや

頼之助ム、此方も同意だ忠勤は是迄だ

藤七郎さうだく落城しちまッちやアどう

なるものか

八十治 己も覺悟は極ッちまッた

雄治 斯う勞れきッて居る處へ

源吉 万一敵の多勢に出合ひ

和助 生擒れちやア残念だ

貞吉 定めし火焰のァノ中で上を始め一同

も

茂太郎 死する處は異るども

武治 此山上に枕をならべ

藤三郎 死ぬと覺悟が極ッたら一同並んで立

派にやらう

俊彦 實成時さへ破れなけりやアまだ爰迄

にはゆくまいにナア

勝太郎そりやア恐痴だ朝敵の名を取たから

には遅かれ早かれ斃れるのだ

貞吉 斯うみんな心が極ッたら此絶頂の廣

ひ塙所で一所に揃ッてやらうじやアな

いか

茂太郎ム、然うしやうサア往うく

上へ立上らんとする折から響に聞ゆる

人馬の物音藤三郎は聞耳立

ト寄太鼓喇叭の音する

藤三郎 籠に聞ゆる人馬の音は我く爰に在

るを知て敵勢寄ると覺えたり

後彦 今敵軍がヤッて来てもモウ駈合ふ勇氣は無いや

勝太郎 どうでモウ叶はねへから己は爰でや

ツちまうは

藤三郎 ム、おれも然うしやう

具吉 サアヤツつけろ

ト四人自殺しやうとする

藤三郎 ア、コレ／＼さう急ぐには及ばなひ

は敵は多人数でも有まい己が一入り

へ下ッて命の限り防ぐから其内音は絶

頂で心静におやんなさい

藤太郎 イヤ安達この勇氣には忍入た拙者

も少しは働けさうだ御助力し升う

武治 貴公が助力するなら共に力を添升う

藤三郎 兩名の助力があればさう脆くは討れ
なひ暫くは急度堪えるから音急には及

ばないぞ

後彦 御厚意有難ひ夫じやア我／＼先へや

り升

藤三郎 猶豫は出来ないサア参らう

武治 心得た

上へ勇み進んで三人は籠をさして下り

ゆく

藤三郎 茂太郎 武治は名々手鎗を提

げて坂口より下りて下手へ還入る

後彦 そんなら此間に我／＼は

勝太郎 少しも早く

藤三郎 ヤッてしまわう





上へ借しや小松の若緑り木の葉と共に
今や散る山路を傳ふて

ト十三人立上ッて上手の上り口へか
ゐる此見え山下し三重にて

道具廻る

本舞臺正面古びたる辻堂上の方大なる岩
山上り口の坂道所々松杉の立樹後一面の
岩山都て飯盛山麓のてい爰に前の三人官
軍八人と戦ッて居る

山下し喇叭の音にて道具止る

ト烈しき立廻り有て茂太郎武治は官
軍三人ツゝと戦ひながら上下へわ

かれては入る藤三郎は二人を相手
に立廻り二人叶わず下手の奥へ逃

て這入る藤三郎是を退て下手へゆ
く下手の奥より官軍の將華美なる
打扮にて四人抜刀にて出る双方乾
度なる

藤三郎會津藩安達藤三郎

軍平 長州藩中川軍平

退藏 土州藩佐久間退藏

浦山重右衛門

宮城物太郎

ト是より跳への鳴ものになり五人花

花しき立廻りよろしく有てト々四
人共にまどめる上下より茂太郎武

治出て

茂太郎安達氏

武治 無事でしたか

藤三郎 兩名も能くやられなかつた

茂太郎 薄手一とつ負はないのだ

武治 此通りだ

ト足を踏立て兩人無事を示し

もツと敵が来れば能ひ

藤三郎 もう再び敵は来まい夫に無益な人を

殺すには及ばないは

茂太郎 モウ山の上じやアヤツちまつたらう

武治 勿論さ今往たどてモウ皆死で居るは

藤三郎 縦ひ其期には後れるとも隊中の者の

死骸の側で一處に枕を並べやう

茂太郎 夫じやア是から

藤三郎 直に往う

上 三人りは登りにさしかゝる遙か後

に聲有て

ト向ふ揚幕にて

佐吾七 主公ア

藤三郎 誰か此方を呼ぶやうだ

茂太郎 又もや敵が寄せたのか

武治 もう一と動らきやつてやらうか

上 互ひに屹度身構なす向ふの方より

喉急と敵にはあらぬ佐吾七が

ト向ふより三幕目の佐吾七身輕に打

拵て走り出直に本舞臺へ来て

佐吾七、主公能く御無事で居て下され升

たナア

藤三郎 備は佐吾七どうして参つた

上 問はれて涙の顔をあげ

佐吾七 若衆隊の一と群が飯盛山へ登つた

といふ人の噂を聞くと其儘もしやと思ひ

お跡を慕ふて参り升た

茂太郎 此者は御存の人ですか

藤三郎 以前召仕升た佐吾七といふ農民でム

るがコレ佐吾七備は又何しに爰迄参ッ

たのだ

佐吾七 吾備がお跡を慕ふて参り升た其譯は

マアお聞成されて下さり升

ト山下しをかすめ床の合方

主公にお別れなされてから御老母様も

嬢様も明らかめてはお出成さるやうでも

どうしてくお苦慮成されて夜の目も

逢はず追々軍の模様はわるくソレ御城

内へ敵が込入たヤレ御城下が火に成た

と追々迫る味方の御難儀兎もあれ軍の

中へゆき主公の御安否をお尋申て参り

升うと申上ればお二人りとも吾備風情

に勿躰無ひ兩手を突て只一ト言

上 忝いどの御仰せ

夫から直に内を出で或は濇澤大野ク原

上 上さしも烈しき彈丸の雨霽と降る中

を

彼方へ潜り此方へぬけお尋申す其うち

に飯盛山との噂をきし駈付升た甲斐有

て御無事なお顔を見あげ升て漸々安堵

致升た能くマア御無事でお出成され升

たナア

上へ涙ながらに物語れば

藤三郎スリヤ夫故に参りしどか

茂太郎農民の身にて主人を慕ひ此亂軍の其中を

中を

武治 尋て来る志し感心致すぞ

藤三郎コソ佐吾七昨日は我も討死と覺悟は

せしが不思議に一命存生て備に逢ひし

は悦ばしひぞ

上へ言ひつゝ着せし陣羽織手早く脱て

差出し

身に添着せし陣羽織紀念なりと届けて

呉れよ

ト差出す佐吾七受取て

佐吾七是を紀念と仰ッしやり升るは夫では
どうでも主公は

藤三郎わが白虎隊の人くは昨日多くは討

死され僅かに残る十六人此山へ死れし

が早本城も燦となれば今は誰の爲めに

か存生へん一同此山の絶頂にて切腹な

さんと致せし折

茂太郎籠へ敵が寄て來たので此三人して山

を下り

武治 敵を防いで跡のものを先へ死せてや

ツたのだ

佐吾七夫では貴方等お三人も其旁と御一處

に

藤三郎ナアニ山の上ではモウ背腹を切て死

で仕舞たのだ其譚ゆゑに此三人も跡よ

り續き其塙所で共に自殺を致すのだは

佐吾七そんなら直にアノ此山で

藤三郎君辱しめらるゝ時は臣死すと珍らし

ひ事では無ひ力盡きて死するのは武士

の常だ立歸ッて傳へて呉れ

佐吾七夫ではどうでも御存命ではムリ升ぬ

かア、コレもしやと頼んだ甲斐もなく

御生害遊ばし升たと申上たらふ二人り

様は其お歎きはどのやうぞ一ト目お逢

はせ申たひにも夫も叶はぬ遠路の道今

お話しの御様子では縦ひちとめ申たと

てお止まり成さう苦もなし悲しい事

に成升たナア

上へ涙と共にかき口説主を思ひの眞實

心藤三郎も涙を拂ひ

藤三郎備が眞切の志しは死すとも必忘れは

せぬ心も急ば備は少しも早く立歸れ

佐吾七歸る事は歸り升がせめて主公の御先

途をお見届け申たうムリ升何卒吾を

御一處にお連れ成されて下さり升

藤三郎イヤ夫は成らぬ万一敵勢來る時は却

て備の爲にならぬ又我くが最期の邪

魔だ爰で別れるから早く歸れ

佐吾七夫では其塙處へ参る事は叶ひ升ぬか

藤三郎徒な事だ歸れといふに

上へ尖き詞に佐吾七が

佐吾七ハア

上ハット計りに泣沈む傍の二人りも
心を察し

武治 備の歎くも尤もだ我も城外に一人り
の母を残りし置けば餘所事とは思はぬぞ
茂太郎定めし悲しく思ふだらうが武士のな
らひ是非が無ひ明らかめて歸るが能ひは
佐吾七ハイ左様なら仰に随ひ歸り升〇歸り
升〇もし主公

上ハ 是今生の刑れぞと見上げ見下す主
従が心に告る暇乞

ト藤三郎佐吾七顔見合せて名残を惜
しむ事有て藤三郎氣をかへて

藤三郎そんなら是で別れるぞ〇サア往升う
茂太郎左様致さう

武治 佐吾七早く歸れよ

上ハ 歎きを餘所に三人はもとの山路へ
登りゆく

ト三人上手の坂口を登り奥へ這入る
上ハ のう是暫しと佐吾七が止むるに難
き死出の山

佐吾七 那の様に仰ッしやるからは思ひ切て
歸り升うア、是から歸ッてお二人りの
其お歎きが思はれるわへ

上ハ 力なく行きかけしが
イヤイヤ 其御先途も見届けず御生害成
され升たと申上るも〇ム、コリヤ葉そ
知れぬやうに跡から登ッて餘所ながら
イヤイヤもしやぶ目にかゝッたら又お

叱りを受るで有うと言ッて此處行かれ
もせザコリヤどうしたら

ト是を木の知らせ

宜からうナア
上ハ 暫し行み

ト山下し三重にて道具廻る

本舞臺四間通し高足の二重岩山所々岩の
丸もの此二重の前へ一段低く岩山をふた
へに飾り舞臺真中より下よりに切穴此切
穴より二重の下の方へダラ／＼に岩石の
登り所々松杉の立樹向ふ一面山／＼より
若松城の火の手見たる遠見前の書割と略
同じズット舞臺前へ低き山の張ものに杉
の梢を見せ都て飯盛山絶頂のてい愛に二

重の上に以前の白虎隊切腹して斃れたる
死骸所々に横たはり有り

山下し三重にて

道具止る

上ハ 梢々を吹荒む風は身にしむ三人が
木の根岩角踏しめて同志の跡をひと
筋に

ト舞臺の切穴より前の三人勞れたる
こゝろにて漸々登り来る

上ハ 心弛めば身内の惱み吐息さへも断
断て足もまどろに登り來て稍頂に差
かゝり見れば無漸や十三人鮮血滾々
と敷流れ算を亂せし最期の形状
ト三人前後の死骸を見て互ひに顔見

合要ひに迫る仕打

藤三郎 何れも見事にやり升たイヤ中く立派なものだ

武治 敵の奴等に見せてやりたひナア

茂太郎 どうで一度は見に来るわけだ

武治 此方も負ずにやらかさうよ

茂太郎 此人等と共く

武治 枕を並べてサア早く寝やうよ

上へ 遙かに遠き本城の方に向ひて拜禮

なし

ト三人後に向ひ手を突て拜禮する山下しを幽め小敷のわしらひ床の合方

藤三郎 御前様には國家の爲に御心を盡させられしも却て賊名を受給ひ今日落城に

及ぶ事嘸御無念に入らせられ升う

茂太郎 我くどもも數度の戦ひ今は身軀勞れ果

武治 最早御用に立ざる身の上忠勤も早是迄にムり升る

藤三郎 是にて御ン暇

三人 申上奉り升る

上へ 拜し終つてもろどもに死骸の傍へ

に座を占めて

藤三郎は真中に上の二重茂太郎武治は前の低き處に上下へわかれてよろしく居住う

上へ 心静かに三人が互ひにもろ肌押ぬ

いで刀逆手に扱持つて

ト三人肌を脱て襟を搔あげ刀を扱て逆手にかまへ

藤三郎 どうだへ死ぬと極つたら腹の中が暗々したナア

茂太郎 昔しの豪傑が討死をした時も斯なもので有たらうか

武治 腹の中の爽然した處は變つたものじやア無からうよ

茂太郎 随分働いたが微觸傷がひとつ無ひや奇麗なものだ

ト腹を叩ひて腕をまくつて見せる

武治 己もさうだ

ト腹を突出して見せる

藤三郎 同じ隊中でも此三人は死ぬ迄一處に

並んで死ぬのは餘ほど因の深いのだア

能ひ心地だ〇ヲ、先へ往た者は嘸待て居るだらう

茂太郎 少しも早く

武治 もろどもに

上へ 胸撫下し氷の刃一度に腹へ突立る

折しも彼方の坂口より主の先途と佐

吾七が夫と見るより走り寄り

ト三人一度に腹へ突立る此時前の切

穴より佐吾七急ひて登り來て此跡を

見て側へ駈寄り

佐吾七もう御生害成され升たか

上へ ワット計りに泣伏せば安達は苦し

き息をつき

藤三郎 佐吾七まだ居ッたか
佐吾七 此の覺悟を知りながら何マア此儘歸
られ升う

藤三郎 武士の最期の際近寄て邪魔致すな
茂太郎ヲ、佐吾七能く參ッた我々の腹を

切るところを其處に居て能く見て呉ろ
武治 武士の死ぬのは斯なものだコレ泣の

は未練だ確然と見届けて呉れ
藤三郎 佐吾七人は一代名は未代だ

佐吾七ても情無い此形狀
ト沈と三人を見つめる

藤三郎 イヤ冥府へ追つかん
茂太郎 佐吾七さらばだ
武治 確然見て居ろ

上へ突込む刀一文字に右の肋へ引廻し
ト三人一度に刀を引廻す

上へ飯盛山に忠臣の其名を遺す白虎隊
譽れは世々に

ト茂太郎武治は咽喉を掻切て落入る
藤三郎は刀を胸先に突立て十文字に

切下る佐吾七合掌して涙に呉る
此模様幽めたる山下し虫笛床の

三重にて

幕

六幕目

若松城内火薬藏の場

城内 太田邸の場
若松城 北廓の場
同城外 山際の場

同返し

太田小兵衛座鋪の場

本舞臺上より大なる白壁土藏二棟棟の後を見せ此前折まはして柵欄下の方家中邸のこゝろ板塀の内に柿登の屋根松のさし枝此前に桔槔の井戸向ふ奥深く石垣の土手に松の並木土藏の壁に彈丸の痕などあり所々の家根に火のうつりて燃かゝり居る都て城内火薬藏のてい爰に百姓作右

衛門同勘太工源太郎同長藏消防組卯之助其外消防組大勢勇ましき身輕の打拵にて龍吐水を二挺立て井戸より水を汲上げ所々の火を防ひで居る
此見え寄太鼓喇叭の音烈しき砲聲にて

幕明く

ト頻りに彈丸飛散る皆々聲をかけ合せ捨臺詞にて所々の火を消しとめる
事宜しく有るとト所々の火を全く消しとめる

大工源太郎 来てくくく爰は大底水は廻ッた前の方へまはッたく
作右衛門 ヲット承知だ此龍吐水を戸前口の方へまはすだく

人足 ヲットよし

ト人足四人二挺の龍吐水を擲いて土藏の後へは入る残りの人足非戸を玄蕃に水を汲込んで土藏のうしろへ運ぶ事烈しく有る向ふ三幕目の白木屋喜左衛門手代物七火事装束同じく手代二人持繪の粗重切溜酒の二升樽杯さし擔いにして昇て出て直に本舞臺へ來り

喜左衛門 オ、源太郎さん爰に居なすつたか
源太郎 ヤア白木屋の主公どうして爰へお出成さい升た
作右衛門 能くマア此中をムらしヤつた何して何處から遁入て來さつしやれたへ

百

喜左衛門 イヤモウ雨のやうな鐵砲玉の中を漸々潜りぬけて來升たよ
源太郎 夫じやア軍の中を通つてお出成すつたのですか

喜左衛門 城下は合戦の眞最中鐵砲の音と煙りどで何が何やら些ともわからず
惣七 丸で眼が眩んで仕舞て夢中で通りぬけて來ましたのさ
作右衛門 然してマア此御城内へ何しにムらしヤつたのだへ
喜左衛門 女共は皆逃して仕舞跡に殘つた男の手ではんの手拵の握り飯と煮しめおまへさんがたの息つきにと酒も添へて持て來ました

源太郎 夫はどうも厚い思召有難うムリ升
作右衛門 夫を持ってムツたのかヤレレ御眞切な事だナア

源太郎 時に主公お宅は火はどうでムリ升
喜左衛門 城下は三ヶ所程火に成て居升が吾儕の所は幸ひに火はかけはなれて居升から今の分では焼る氣遣ひはムリ升ぬ夫から此粗重はどうか御上へ献上したいと思つて持て來升た

源太郎 ナイ頭
卯之助 なんだ
ト言いながら土藏の後へ出て來る
源太郎 今白木やの主公が斯う言ふ物を消防方の息つきにと態々持て來て下すつた

百一

卯之助 どうか人足にやつて呉んぬへ
有難うムへ升早速皆に喰はせてやり升何にしる親方も初穂をお上ん成さいな
源太郎 夫じやア皆さんでお初穂を戴き升う
作右衛門 さんサア手をお出し成さい
ト三人して切溜の握り飯を喰い茶碗で酒を呑む事有る此内皆々捨ぜりふよろしく
喜左衛門 先祖代々の御恩がへしを斯ういふ時にまたひと思ひお上へ物を献じるのに使ひでは失禮ゆゑ夫で自身に出て來ましたよ
卯之助 吾儕ア殿様に頼れて江戸からお供を

して来たのだから命限りにヤツつける
了簡さ

源太郎 吾儕や此作右衛門さんも長らく御恩
をうけて居るから

作右衛門 内を出る時水盃をして死ぬ覚悟で
お城へ遁入ッたのがアすよ

長藏 こちども命を捨て殿様への御奉公
勘太 出来るだけの事はやるつもりさ

喜左衛門 さうしてお上はどこにお出なさい
升へ

源太郎 御本丸のお庭にお出成さると言ふ事
主公には知れ升まい一處に往て上り

喜左衛門 そりやア有難うムリ升
源太郎 吾儕やア主公の御案内をして来升か

ら跡をどうぞお頼み申升

作右衛門 緩り往て来さッせへ
卯之助 爰は大底いひやうだ

源太郎 夫じやア主公参り升う
喜左衛門 物七備も二人りと一處に来ひ

惣七 畏り升た
源太郎 サアお出なさい升

ト源太郎さきに喜右衛門物七手代二
人組重を擔ひて上手へ遁入る

卯之助 ヤア〜大變だ〜アレ〜北の方
が盛んに成て来た

作右衛門 ナ、コリヤア緩り辨當を喰てヤア
居られぬへや

卯之助 こいつを北口へ持ていつて替り〜

に喰はせるとしやう

作右衛門 夫じやア已持てゆくべし
卯之助 直と廻らう皆能いか

長助 ヲット承知だ〜
卯之助 サアヤツつける〜

ト作右衛門勘太切溜酒樽をもち卯之
助長藏人數みな〜土藏の後へ遁入

る烈しき砲聲喇叭の音にて向ふより
三幕目の俠客熊倉の新五郎華美なる

好の打扮にて官兵二人と戦ひながら
出て来り花道にて一寸立廻ッて直に

本舞臺へ来て烈しく切り結ぶ又向ふ
より新五郎の子分虎藏細禰好の打扮

手負にて官兵一人と戦ひながら出て

花道にて屹度成て舞臺を見て

虎藏 親分か
新五郎 虎藏緊々やれ

ト虎藏戦ひながら本舞臺へ来て入交
ッて立廻り虎藏又負傷を受けて其場へ

倒れる新五郎是を庇護立廻りの内官
兵三人叶はず下手へ逃て遁入る新五

郎是を追はんとして虎藏を氣づかひ
立戻て介抱して

虎藏 堅然しろ疵は浅いぞコレ虎藏堅然
しろ敵は城内へ遁入て居るぞ

ト是にて虎藏了然して
虎藏 親分悔しいナア

新五郎 モウ斯う成ちやア仕方がぬへや

「言ひながら虎藏の顔を沈と見て
虎藏能く爰迄にやッて呉た嬉しいぞ鬼
の目を買く家業をして悪黨交際仕て
居るが義理と情といふ事は平常忘れた
事は無へ長の年月御恩に成た御領主様
への奉公己は命を捨る氣だと言ひ聞
したら備等もさしたる恩も無へ己と一
處に死ふと度胸を極めて能く命を出し
て呉れた己ア死でも忘れぬへぞ
成願 親分おめへにさう言はれりやア是で
死でも憾はぬへモウスツバリ弱ツちま
ツた親分何卒吾儕を爰で殺して呉んぬ
へ」

新五郎 呆を言へ是ッばかりの淺傷にそんな

弱い音を出す奴が有るものか迎も死ぬ
なら一人りでも對頭の奴等を殺して死
ぬ

成願 ム、然うだ能うござすモウ一ト働らき
やッつけやまやう

新五郎 ム、能く言ツた緊々やれ
成願 苦慮なさんな度胸を極めたら大丈夫
だ

新五郎 女の隊が危へから早く往て加勢をし
ろ

成願 承知しやした
ト虎藏立上ッて
そんなら親分

新五郎 地獄で逢うぞ

成願 どれやツつけやうか

ト虎藏跟踪に成て向ふへ遣入る

新五郎 彼奴も可憐そうな野郎だナアドレ己
も跡から乗ツつけやうか

ト新五郎花道へゆきかける上手の奥
より五幕目の田代猶左衛門軍服にて
出て來り

猶左衛門 コレ新五郎まで

新五郎 貴方は田代様何ぞ御用でムリ升か
猶左衛門 備に限る役目が有る仕懸せて呉れ

新五郎 然して吾儕へ御用と仰ッしやひ升の
は

ト猶左衛門懐中より普状を出して
猶左衛門 是ハ備仙臺へ立越て宮様のお側に

附添ふ覺王院へ此状届けてくれ

新五郎 節角のお頼ではムリ升がどうか夫は
餘人に仰ッしやり付て下さい升

猶左衛門 ソリヤ又なせに
新五郎 多くの子分が吾儕と死ば一處と誓ひ
を立て命を捨て居り升から共に死にや
ア其奴等にどうも義理が濟升ぬ夫故お
断りを申升

猶左衛門 備が義侠の魂ひ左もあらん尤もで
は有るなれど今此中を仙臺へ首尾能く
使ひを勤る者は備ならで外に無し殊更
大切な御方の御身に付ての大事の使
ひ何を致すも上への忠義私の意氣地を
捨て是非とも此役勤てくれ

ト是にて新五郎沈と思入有て

新五郎解り升た死ぬも活るも忠勤宜しうム

り升お使ひの役勤るでムり升う

猶左衛門 夫にて我も安堵致す然らば此状

ト書状を渡す新五郎懐中して

新五郎 確然と預り申升た

猶左衛門 過急の用事少しも早く

新五郎 南門から裏道傳ひ

猶左衛門 我は是より北口の助力をなさん

新五郎 夜道をかけて是から直に

猶左衛門 頼んだぞ

新五郎 心得升た

ト新五郎花道附際に至り急度向ふを

見込む是を木の知らせ新五郎は逸散

百六 に向ふへ遣入る猶左衛門跡を見送る

此見え

前の鳴ものにて道具廻る

本舞臺三間の間三方折まはして常足の二

重庇椽側付き向ふ床の間墨繪の山水の襖

上の方奥へ下げて一間の障子屋簾下の方

一圓低く樹木の茂み此前四ツ目垣此向ふ

城中の遠見平常の處枝折門都て城内太田

小兵衛庭口座敷のてい爰に二重の真中に

太田小兵衛軍服にて重傷を負ひ床几にか

かる是を妻の葉末介抱して白布にて小兵

衛の右の腕を巻て居る平舞臺に會將小原

右衛門入江惣助何れも手負にて手鎗を傍

へ置き椽側に腰を掛て居る是を椽側の上

惣助 今は随分痛むがナア是でも戰場へ出

りやア何でも無ひは

右衛門 太田氏の彈丸は中く深く遣入たや

うだが如何ですな

小兵衛 彈丸は抜たから苦慮はムらぬ肩先は

ほんの微觸た計り腕は十分に遣へ升は

葉末 良人お痛みは如何でムり升へ

小兵衛 なんの是しきの傷に痛み杯は覺えぬ

はサア出かけやうかな

右衛門 サア参らう

ト三人立かゝる

白菊 ア、もふし只今お粥が出来升から召

上ッてお出成され升

小兵衛 粥では能う氣が付た早く持て参れ

に娘白菊文金島田振袖形り襟がけ弟乙丸

(八歳家來伊惣次)の三人にて介抱して居る

此見え合方に砲聲を遠く

かすめて道具止る

右衛門 入江氏今の南口は危なかつたナア

惣助 何をいふにも大勢に一度に押込れた

のだから苦戦だつた

右衛門 既に破れるかと思つたが能ひ按排に

喰ひ止た

惣助 北口も一時だから双方應援する事は

出来ずゑらかつた○時に面部はどうだ

へ

右衛門 斯う手當をすりやアモウ大丈夫だ貴

殿の足はどうだ踏立られるか

白菊 畏り升た

ト葉末白菊奥へ遣入る

右衛門南口はまづ十分に往たから是からは

北口だ

惣助 田中神保の隊へ應援するのだ

乙丸 重も軍に出たいナア

右衛門ム、ム、イヤ感心く

惣助 幾歳になるへ

伊惣次今年八つにおなり成され升

右衛門 流石は當家の子息だ勇氣が有るナア

乙丸 お爺様重も一處に参りたうムり升

小兵衛 ヲハ、ハ、ハ、備等が参ッては邪魔に

なるは軍に出るより備はナア平常の通

り馬場へ出て精出して肌を揚る夫が備

の忠勤だ

ト合方に成り奥より葉末白菊粥を調

へ膳へ乗せて持出て

白菊 お粥が出来升てムり升

葉末 お熱ければこゝに冷水がムり升

小兵衛 サアおふたり共箸をおどり成さい

右衛門 是は何寄の御馳走

惣助 早速頂戴致さう

小兵衛 腹が減ては働け升ぬ澤山召上れ

ト三人拾盃詞にて粥を喰し終る

乙丸 姉上鎌砲の音が遠く成升た

白菊 南口の敵軍は退ひたと言ふ事ゆゑ多

分は北の御門で有う

小兵衛 アノ遠く聞える砲聲は北口に相違無

ひ

ト下手より兵士一人走り出て

兵士 北口が危うムれば御出張下さいく

ト言ひ捨てて下手へはいる

小兵衛 北口が破れる時は二の木戸が危ふム

右衛門 如何にも左様だ直様出かけやう

惣助 太田氏お先へ参る

小兵衛 直様後より續き升

右衛門 女中等お世話でムツた

ト兩人手鎗を引提て意氣組で下手へ

遣入る小兵衛思入有て

小兵衛 葉末白菊○乙丸も是へ参れ

三人 ハア

ト三人上下より側へゆく

小兵衛 備等も兼て承知で有うがもし北口が

破るゝ時は味方の運もモウ是迄じや其

時は早覺悟致せよ

葉末 能う心得て居り升る

白菊 お心安う思召升せ

小兵衛 然して備等の決心は如何致すな

葉末 敵二の木戸迄込入りしと承はッた其

時は

白菊 乙丸を刺殺し母様もろとも自害して

死する覺悟にムり升る

小兵衛 ム、よし○コレ乙丸備も武士の忤今

日こそは此父も討死なす可き時なるぞ

もし敵勢二の木戸へ込入りしと聞くな

らば早落城の時と思ひ見苦しき振舞致すなよ

乙丸 お爺様お討死遊ばせば母様や姉上と重も一處に死に升る

小兵衛 オ、出かした夫でこそ我子なり必夫を忘るゝな思はぬ隙入りドリヤ出張致さう

伊達次拙者も御供致し升る

小兵衛 イヤ、備は跡に残り此三人が万事の世話備を頼み置ぞ

伊達次 夫ではお供は叶い升ぬか

小兵衛 何れで盡すも忠義はひとつじや

伊達次 ハ、委細畏ッてムリ升る

乙丸 お爺様其お刀を戴かせて下さい升

小兵衛 ム、此小刀が欲しひと申か

乙丸 何卒戴きたうムリ升

小兵衛 望に任せ遣はさう

ト帶せし小刀を解て乙丸に渡す

乙丸 有難うムリ升る

小兵衛 備は夫を何に致す

乙丸 此お刀で腹を切升

小兵衛 ム、

トホロリト思入

左様か今戦國の中とは言へ今年漸々儼

かに八歳〇年には生れ勝ッた奴じやナ

ア

ト沈と乙丸を見て又氣をかへて

暫時の猶豫に時刻の後れイデ北口へ走

向はん

ト鎗を搦込で立上らうとして重傷に

惱みヒヨロ／＼とする

白葉末 ア、もし

ト双方より是を助けて

白菊 そんなら

是が

ト乙丸は前より廻る四人沈とわかれ

の思入宜しく有て小兵衛屹度なり

小兵衛 ム、

ト双方を拂ひ退けるを木の知らせ

未練で有う

ト鎗を杖に屹度なる此模様

早き合方にて道具廻る

本舞臺通し平舞臺向ふ一面城内の石垣天主櫓など切出しに遠く見せ都て城内北口廊内のてい爰に序幕の神保も園赤岡も蝶女隊凛然打扮にて抜刀四幕目の女隊八人長刀を持官軍大勢と戦ッて居る

寄セ太鼓喇叭の音砲聲にて

道具止る

ト皆／＼入交りて戦ふ内女隊八人は戦ひながら上下へ別れて遣入る跡も園も蝶官兵と立廻り大勢にとりまかれて危ふく成る向ふより序幕の赤岡も竹華美なる好の打扮陣羽織を着て長刀を搦込馬上にて走り出て花道にて

竹 園様か

竹 御助力致し升る

トつかくど本舞臺へ来て此中へ還入り烈しく立廻り有る向ふより官軍の將中村半次郎筒袖の陣羽織裁附附太刀劔銃を帯び八角の棒を持走り出て花道にて

半次郎各々参謀の令でムる彼等女の身にて國家に殉ずる可憐の至り必砲發を止め宜敷是を生擒すべし

トつかくど本舞臺へ來り官軍皆々を制す竹も園も蝶は是に構はず無二無三に切り込む立廻りの内も園も

蝶は戦ひながら官兵皆くど上下へ遁入る半次郎も竹のこり双方屹度なる

竹

會津藩赤岡竹も對頭致し升るト烈しく切り込む半次郎は棒にてあしらひ立廻りよろしく有てト竹長刀を打落されて馬より落ち危ふくなる上手より小原右衛門入江惣助出て竹を庇護半次郎にかゝる上下より官兵大勢出て小原入江竹の三人を取まく立廻りの内三人はチリ、チリと跡へ下り上手の奥へは入る官兵皆々是を追ては入る半次郎續ひて行ふとする上手より會津藩和次郎派出

なる好の打拵手鎧を掲げ出て半次郎を押戻し屹度なる

和次郎會津藩時和次郎
中次郎薩州藩中村半次郎

ト談への鳴ものになり半次郎棒を投捨太刀を抜き双方烈しき立廻りよろしく有る

知らせに付兩人立廻りながら

此道具まはる

本舞臺上へ寄せて大なる青山の丸もの上へ人のあがる事有る下の方小さき藥師堂石の手水鉢正面通しに小高き草の土手所々松の立樹向ふ山くの遠見都て城外山際のでい風の音に喇叭の音を

かすめて道具止る

ト下手より赤岡竹官兵一人と戦ひながら出て立廻り有て官兵叶はず下手へ逃ては入る竹戦ひ勞れてハツトなる沾然としたる合方に成り竹手水鉢に心付さし寄て水を呑みホツトト息吐く上下より園も蝶戦ひ勞れて出て來り

園 ヲ、竹様

御無事でムり升たか

ト兩人其儘だうとなる

お竹 お二人りどもに能う無事でお出成され升た

お園 隊中のお方も皆亂軍の其中で

お蝶 大抵お討死成された様子
お竹 妾とても身軀勞れモウ迎も御用に立
升ぬ

お圖 妾等も同じ事名も無き者に生擒れ世
に憂恥を晒さうより

お蝶 潔よく自害して死ぬると覺悟極め升
た

お竹 ソリヤ妾も御同意でムリ升夫では爰
で三人ともに

お圖 清く最期を
お蝶 致し升う

ト三人宜しく陣羽織をぬぎ最期の支
度をして小刀を扱はなす此時上下よ
り官兵六人出て三人にかゝるお竹は

二人の官兵と立廻りながら山の上へ
上り立廻りの内ドント砲聲するお竹
彈丸に中ツてワット斃れる

お圖 ヤアお竹様が

トお圖お蝶はお竹を氣遣う處を官兵
双方より押へ付て細をかけるお竹起
上ツて胸板を撃れたるこゝろ苦しん
で落入る上手より參謀北垣大助陣羽
織陣笠凜然打扮兵士二人付て出て來

り

大助 婦女の身として國家の爲に一命投打
防戦なすは天晴なる志し

お圖 此上のお願ひは此場に於て妾等を
お蝶 早う首切て

引返す

本舞臺もとの太田の座敷になる爰に床の
間へ彌陀の像の掛物をかけ白菊飾りなき
文金島川の結立の鬘紋付の振袖乙丸紋付
の羽織袴にて兩人床に向ツて拜をして居
る風の音合方にて

幕明く

トすぐに床の淨瑠璃に成る
上へ四面に楚歌の聲する若松城の秋
の暮奥の一と間に白菊が覺悟を死出
の一と筋に乙丸が手を携へて最靜や
かに座になほる

自菊 今砲聲の遠くなりしは北の御門へ敵
引付ると太鼓喇叭の音にてすぐに

幕

兩人 下さり升

大助 イ、ヤ決して命は取らぬ○コリヤ陣
中へ引居え勞ツて遣はせ

兵士 畏ツてムリ升る
ト大助山の上へ上る兵士二人付て上
る大助はお竹の死骸を憐れむ兵士二
人お竹を引起す大助熱々見て

大助 忠義一圖の心より朝家の御趣意を辨
へずあたら命を

ト是を木のかしら
可憐なものじやナア

ト此模様風の音合方にて

引付ると太鼓喇叭の音にてすぐに

勢の皆集りしものならん過刻爺様の仰

乙丸 敵二の木戸へ込入らば覺悟せよと仰

白菊 ッシヤッた事能う覺えて居り升る

白菊 敵の手にとらはれて要死耻を見るよ

乙丸 今此姉が手にかけて共に冥土へゆ

乙丸 イエ、姉上の手にはかゝり升せ

白菊 われ程立派にいふたのに命を惜むは

未練で有うぞ

乙丸 イ、エ命は惜み升ぬ童も武士の子過

刻爺様に戴いた此刀で腹を切て死升

る

白菊 ナニ切腹すると言やるのか

乙丸 逆も死ぬなら武士らしく立派に死た

うムり升

白菊 勇健な事を能う言やる流石は爺様の

子ほど有て立派な魂しひ爺様にも無

悦び成さるで有う成人したら一廉の天

晴武士に成らうもの

上、時運拙く此儘に苔の花を散すかと

可愛さ可憐さ白菊が保ち兼たる潜然

涙乙丸は大人しく

乙丸 姉上ソリヤ御卑怯でムり升る武士の

死ぬ時に泣くものではムり升ぬ

白菊 ナ、然で有た是は姉が悪るかッた其

立派な心では定めし自殺も遂られやう

連てゆき升る

乙丸 夫では今は爺様にはもうお目にはか

かれ升ぬか

白菊 爺様のみか媽様も此姉も今が此世の

顔の見納め

上、姉弟手に手を取換し互に顔す名残

の涙母は一と間を立出て

ト上手の障子の内より葉末白無垢襖

取衣裳にて守刀を帯し出で來り

葉末 乙丸が勇健な心母も嬉しう思ひ升る

今伊物次が北口へ様子を見んとて出ゆ

きしが頓て歸らば其時が

上、兼て覺悟の西の空

今は互ひに死を待つ計り此上願ふは彌

過し大阪落城の折氏家の三男八丸とて

其年僅か九歳にして刑場へ望み悪卑劣

ザ腹一文字に掻切て大人も及ばぬ死を

とげしと名は著るしく聞及ぶ備も最期

は立派にして名を後の世に残し升うぞ

乙丸 姉上腹の切り様を何卒教て下さり升

白菊 ナ、姉が教てやり升う爺様にも戦場

でお討死を遊ばせば那の世へゆけば爺

様に備もお目にかゝれ升るぞ

乙丸 立派に死んだら爺様がも譽成されて

下さり升か

白菊 ナ、其精神を爺様がも譽なさらひ

でなんとしやう此姉が手を引て一處に

陀の國心に念じて居升うぞや

上 薄き縁にしに親と子が涙に濕る時

しもあれ俄に北の裏手に當り烈しく

開ゆる砲聲に

ト砲聲烈しく聞える

白菊 間近く開ゆるアノ音はもし二の木戸

迄込み入りしか

上 見やるあなたに喉急と立踰る家來

の伊惣次

ト下手より以前の伊惣次走り出て

伊惣次ヲ、奥様もう叶ひ升ぬ敵勢二の木戸

迄込入り升た

葉末 さうして軍の模様はいかに

伊惣次小原様も入江様も早お討死成され升

た

白菊 シテ父上には如何成された

伊惣次主公には何れにお出成さるゝやら彼

方此方お尋申升たが終にお目にかゝり

升ぬ

白菊 亂軍の中なれば御在所知れぬも無理

ならず何れにしてもお討死遊ばせし事

ならん今は母上もろとも此場で自害

し升ほどに備は是成る三人の介錯をし

てたもや

伊惣次どう致し升て此御様子を見るさへも

涙に胸も張さく計りどうして〜此御

介錯は出来升ぬ

白菊 日頃の氣性に似もやらず今と成て後

れたか

伊惣次へイ後れ升る御主人方の御介錯は心

も亂れ腕もなまり所詮吾儕には勤り升

ぬ

白菊 迎も死すべき命なるに長く苦痛をさ

せるこゝろか

伊惣次サアそれは

白菊 苦痛を助けて介錯するか

伊惣次サアそれは

白菊 但しはいやか

伊惣次サア

白菊 性根を定めて返答まや

ト伊惣次ハット平伏する

上 ハット計りに伊惣次は答は無くて

さしうつむく折から爰へ時和次郎

ト下手の奥より以前の和次郎出て來

り

和次郎其介錯拙者が致さう

葉末 貴方は時和次郎様

白菊 亂軍の中をどうして爰へは

和次郎敵の大勢込入て鏑を削る其折から田

代氏より過急の使ひ上のお召と言ふ事

故戰場を切りぬけ只今是へ参りかゝり

日頃入懸の太田氏討死有りし其事を

知らせ申に立寄てゐる

葉末 スリヤ我夫には

白菊 早お討死遊ばせしか

上 兼て覺悟も今更に涙の外はなかり

けり葉末は今は是迄と肌押脱で水の
刃咽喉へぐつと突立る

ト葉末屹度思入有て小刀を咽喉へ突
込みワット倒れる

ヤ、母様には

上ノ駈寄るうしろに乙丸が
乙丸 姉上腹の切やうを早う教へて下さり
升せ

白菊 オ、今教てやり升る

上ノいひつゝこなたに打向ひ

柔嬌女子と兒童の小腕心元なう存升れ
は宜しうお願ひ申升る

和次郎 承知致した心静に致されよ

伊惣次 拙者は再び北口に至り主公のお供を

致升る

上ノ白菊 閑雅に座を占て

白菊 コレ乙丸今此姉が爲る様を心を落付
け能う見て居や

上ノいざ教んども

肌押ぬき守刀をぬ
きはなせば様子見置きて乙丸が肌押
ぬいで座をしむるまだ八歳の最愛氣
盛り今端の母も白菊も可憐のものや
と打守る折から又も聞ゆる砲聲

ト白菊乙丸肌をぬひで支度をする葉
末白菊は乙丸に引さるゝ思入此時
また砲聲聞ゆる

和次郎 又も打立つアノ砲聲

伊惣次 拙者は直様北口へ

上ノゆかんとしては行きかぬる主従三

世のわかれどき

白菊 コレ乙丸まッこの様に爲るのじやぞ

ヤ

上ノ氷の切先雪の肌我と左りの乳の下
へぐさど立れば乙丸がおくれはせじ

と件の短刀腹へぐつと突立る

ト白菊刀を振り持て左りの乳の下を
貫く乙丸それを見て同じく刀を腹
に突立てワット倒れる

上ノ姉は見るより苦痛を忘れ

オ、出かした能く志ヤツた母様譽てや
ツて下さり升せ

上ノ葉末はものを言ひたさも深傷に弱

る斷末魔

ト葉末物の言へぬ苦痛のこなし只手
を上げて乙丸を譽るこゝろ

コレ乙丸出かし升たナア

上ノ姉の詞は乙丸が耳に通じて嬉しげ
に目を見開けば和次郎も

ト和次郎は乙丸の耳に口を寄セ

和次郎 年に似氣なき立派な最期備の自殺は
末代まで若松城の譽れなるぞ

伊惣次 大人も及ばぬ御生害

白菊 ナ、見事

ト是にて乙丸刀を引ふとして引かれ
ぬこなし和次郎後へまはり

上ノ刀すらりと乙丸が首は前にぞ落に

けり

ト和次郎刀を抜て乙丸の首を打落す
上へ哀れと見やる姉の身も苦痛は同じ
知死期とき
憚りながら御介錯

和次郎心得た

上へふり上る刃の下きりくくと引ま
はし今ぞ散ゆく白菊が葉末の露の玉
の緒も切れて果なく

ト白菊刀を引まはす葉末は刀を捨て
落入る和次郎刀をふり上る

伊物次は合掌して見上る

此もやう前の鳴物

床の三重にて

幕

七幕目 大詰

若松城外並木の場

本舞臺通し平舞臺正面一面の松並木向ふ
田畑山くより若松城を斜に見たる遠見
の書割都て城外並木のてい爰に三幕目の
名主忠平羽織袴白木屋喜左衛門手代物七
大工源太郎長藏百姓作右衛門勘太消防組
卯之助其外百姓大勢立かゝり居る

風の音合方にて幕明く

喜左衛門 次第にお城方の様子が悪く名あ
ぬか

るお方は皆お討死なされ

作右衛門 此按排じやア六ヶしひと思ッちや
ア居たけどもナア

忠七 忠義一團の人等が死身に成てムるの
だから

源太郎 どうかしたなら勝やうかど的にした
のはみんな徒事

卯之助 到々殿様が降参してお城はもとより
武器一式

長藏 何も角も引渡してけふアノお城をお
出なさるといふ事

喜左衛門 名を聞てさへにくらしひ薩長の爲
に負になるとは

作右衛門 何たるこんだかこちとらは業が羨
へてなりましねへや

忠七 天道様もわからねへナア

源太郎 何だッて斯な事に志ちまッたんだ
卯之助 己ア悔しくッてく溜らねへのだ

長藏 いくら言ても仕方かねへが
勘太 持堪えてせへムラッしやりやア

百姓 銀鑲持てこちとらも
お殿様のお爲なら

命限りに働ひて

敵の陰囊へ喰ひ付ても
死ぬまでやる氣で居たのだが

④ 悔しひ事に

皆々 成たナア

忠平 皆の衆の悔しひのは尤もだ無理では
ムらぬ又殿様は下くの難義するの
を思召て降参なされたといふ事其思召
を考へると有難ひやら勿体無ひやら此
胸が一ぱひに成て涙にとめどがムらぬ
わへ

喜左衛門 けふアノ城をも出成されて瀧澤
村へも出に成るには是非とも爰は通
り筋

作右衛門 爰へ出張てお待申しと言ふ禮を
申さうと

忠七 皆さん等と言ひ合せ

源太郎 お待申て居るものゝ

卯之助 今にお顔を見た時は

長蔵 涙で口もきけぬへよ

勘太 思へましの事に成たこんだナア

ト忠平 上手を見込で

忠平 アレ／＼モウ向ふから出成さるソ

レアレハ殿様に違ひ無ひわへ

喜左衛門 さうじや／＼御家來衆も僅かなお
供

作右衛門 お二方ともお歩行でムラッしやる

は

忠七 なんだか貧賤しひ御様子だナア

源太郎 昨日に變るお國のなりゆき

卯之助 力のぬけた話したナア

ト皆々 憂ひに濕る思入床の淨瑠璃
に成る

上へ 已に傾く夕日影さすが一國一城を
治めたまひし御身にも世のうき雲の
移りゆく流れは清き瀧澤に歸順の實
表せんと此松蔭にさしかゝる

ト上手の奥より會津大領同じく世子
麻上下大小福草履にて静々と出た
まふ後より秋月啓次郎と近習二人
付添ひ出る

上へ 夫と見るより一同が道端に兩手を
つき

忠平 御前様御機嫌宜しう
上へ 申上れば見やりたまひ

大領 オ、忠平爰に居ツたかオ、喜左衛門

其外大分多人数居るやうじやな

忠平 ヘイ御前様のお通りをば是に一同お

待申上て居り升た

大領 オ、源太郎卯之助何れも是迄城内に

て能う働ひて呉れた一同無事で重疊で

有たナ

忠平 有難ひ其お詞今日瀧澤村へお移りと

申事を承はり升て

喜左衛門 長年御恩になり升た其御禮を申上

作右衛門 お見送りを致升うと是迄参り升て

ムり升る

大領 今は世に無き此方を左程迄に思ふて

呉る志し忘れは置かぬ嬉しいぞよ

忠平 冥加に餘る其の詞恐入升てムリ升る
大領 コレ一同の者我止を得ずして軍を引
受備等にも苦勞をかけ領分の者は活計
に迫り定めし難義致したで有う其を恨
とも思はずして此程より城内にて一命
捨て我爲に力を盡し呉たる事悉く禮を
言ふぞよ

作右衛門 勿躰無ひ事を仰ツしやり升セ先祖
代々御領分で受し御恩の万分一と心計
りは存升ても何の御用にも立升しねへ
源太郎只今のやうに仰ツしやり升ては吾儕
等に罰が當り升御前様には御領分の民
の難義を思召
卯之助 今日瀧澤へお移りに成り升のは有難

すきて吾儕等は實に悔しうムリ升る
忠七 明日からしては敵方の支配を受ける事
と思へばモウ土地に居る氣はムリ升ぬ
長藏 御領主様に離れれば誰が此地に居る
もので
勘太 敵の奴等に出ツくはすと咬付てやり
たくなるは
忠平 恐ながら御前様の御心中を察し申上
升る

上 涙と共に一同が演る詞も飾りなく
赤心見えて哀れなり大領始終開しめ
し暫し黙して居たまひしが威儀を正
しく此方に向ひ
ト大領思入有て近習に曉せする近習

能き所へ床几を立てる大領床几にか
より一同に向ひ

大領 備等が只今の述懐一應は尤もにも聞
ゆれど夫は大きな僻事なるぞ今我言ふ
事を能く聞けよ
ト床の合方

此日本に生るゝもの君と仰ぎ奉るは上
天子御一人の事徳川將軍家を始として
諸侯等は皆臣下なり我若松の城主たる
も上天子より預り奉る所にして土地人
民は皆朝廷の御物なるぞ然るを泰平打
續き互ひの親み厚きより自づと君臣の
妾となり終に領分の者共は其領主有を
知て朝廷有るを知らざるに至りしは是

第一の心得違ひまた此度の戦争も私の
宿意に非ず偏へに將軍家の汚名を清め
御家相續なさしめんが爲なりしも既に
當四月御家再興在らせられし上はいつ
迄無名の軍をなし無罪の民を失ふ可き
や今日謝罪を表する事は順に歸するの
道にして我に於て耻もなく又心にとむ
る處もなし備等は始より皆朝廷の民な
れば假にも朝家を恨み奉るなんぞ恐あ
り勿躰なし爰の道理を能く辨へ必ずと
もに心得違ひ致すまひぞ

上 幼き者に物言ふ如く仁愛厚き教訓
に皆く顔を見合せて涙に袖を絞り
けり

忠平 段々との厚いお諭し能う合點が参り
升た

喜左衛門 御領主様を大切と存ずる故に思ひ
違へ

作右衛門 天朝様を恨み升たは濟ねへ事でム
りやした

忠七 是から仰を守り升て御領主様は變り
升ても

源太郎 是迄通り精出して土地で家業を致升
る

卯之助 吾儕は江戸へ歸り朝廷のお觸をば守
つて家業を致升

長藏 吾儕等も一同に
勤夫 仰は急度

大い守り升る

世子 オ、能くぞ一同了解せしぞ父上にも
御満足に思召すぞ

忠平 只此上はおふたかた様の御身に凶事
の無いやうに夫のみ祈り居り升る

大領 夫とても上の御沙汰我等親子は縦ひ
如何様になりゆくとももし朝廷を恨み
奉るなど有らば我は却て恨に思ふぞ

忠平 恐入升てムり升る

大領 只正直が實なるぞ

忠平 重々のお諭し決して忘れは致升ぬ
喜左衛門 爰に居らぬ人等へは夫から夫と言
ひ傳へ

作右衛門 心得違ひの無いやうに

源太郎 吾儕等より申聞け升れば

忠平 御安堵成されて下さり升

大領 オ、夫にて我も

上へ後言ひさして御聲くもり黙したま

へば一同も涙に濕る其折から遙かに

響く遠寺鐘

ト本釣鐘を打込む

啓次郎 アノ鐘は申の刻

世子 少しも早く瀧澤へ

大領 路次を急ひで参ると致さう

忠平 吾儕等もお見送りを

大領 ア、イヤ夫は却て宜しからぬぞ

啓次郎 多人敷付添参る事はお上へ對して恐

れあり一同是より引取るが能ひ

忠平 夫ではお供は

大い叶ひ升ぬか

世子 随意に宅へ立歸れ

忠平 お名残惜しうムり升る

大領 オ、堅固で居れよ

上へと一言を後へ殘して立出る後に

見送る一同が涙に眼はふさがりてお

名残惜しやと伸上る

ト大領世子は啓次郎近習二人付て靜

に花道へかゝる舞臺の昔くのび

あがッて見送る

上へ心を察して見かへる主従古木の松

の際より夕日に輝く若松城

さすがに惜しき別れ路も頓て維新の

開明に日出度春をや迎ふらん
此段切を木のかしら
主從四人静に向ふはいる舞臺の
皆く見送るもやう

風の音にて幕

會津戰爭夢日誌終

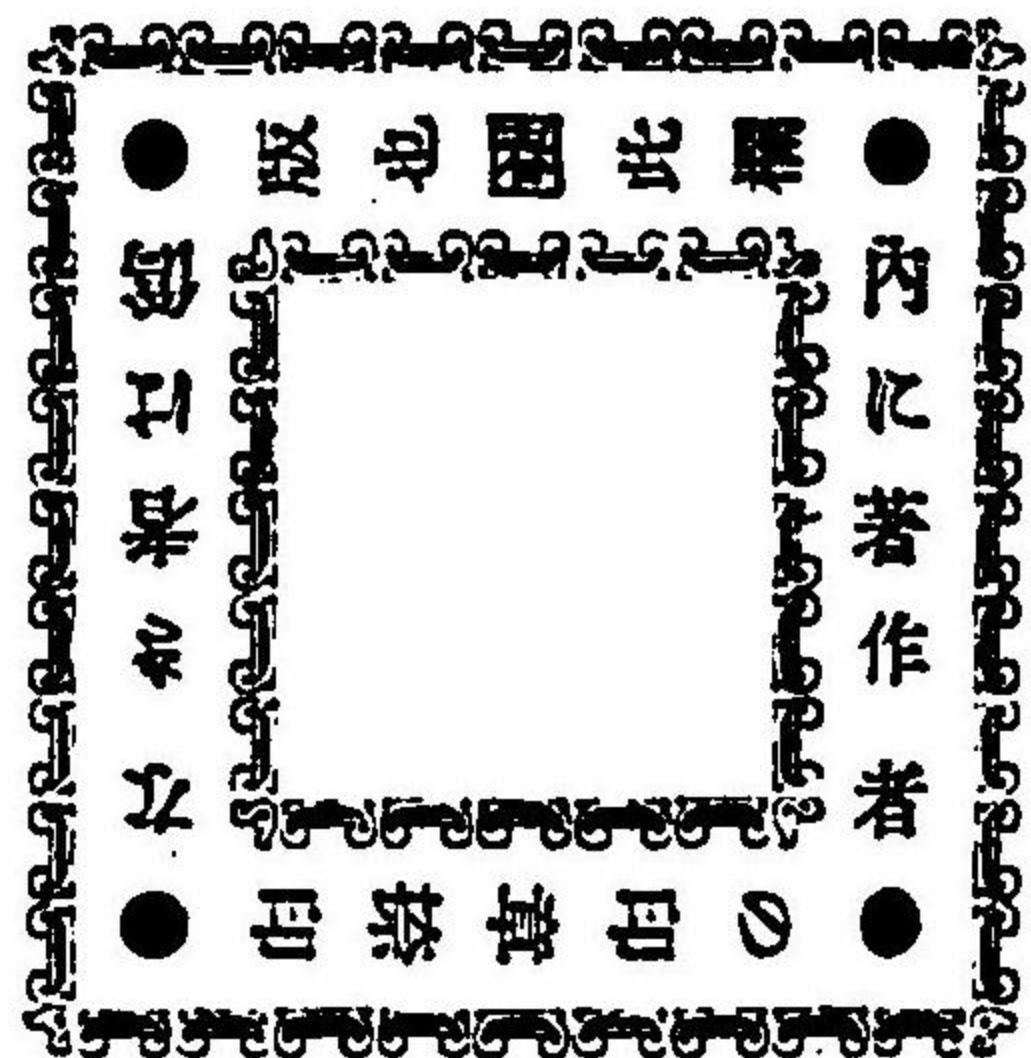
5/10/21

明治二十八年四月廿六日印刷
同 年四月廿九日發行

會津戰爭夢日誌奥附

實價 金貳拾錢

版權所有



著者

川尻寶岑

發行者

和田篤太郎

印刷者

根岸高光

發行所

春陽堂

印刷所

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地
株式會社 秀英舎第一工場
(電話十九番)

一其內之目書說小堂陽春京東

小談	東陽春	大鼓	東陽春	東陽春
六段	六段	六段	六段	六段
小談	小談	小談	大鼓	小談
六段	六段	六段	六段	六段
小談	小談	小談	小談	小談
六段	六段	六段	六段	六段
小談	小談	小談	小談	小談
六段	六段	六段	六段	六段

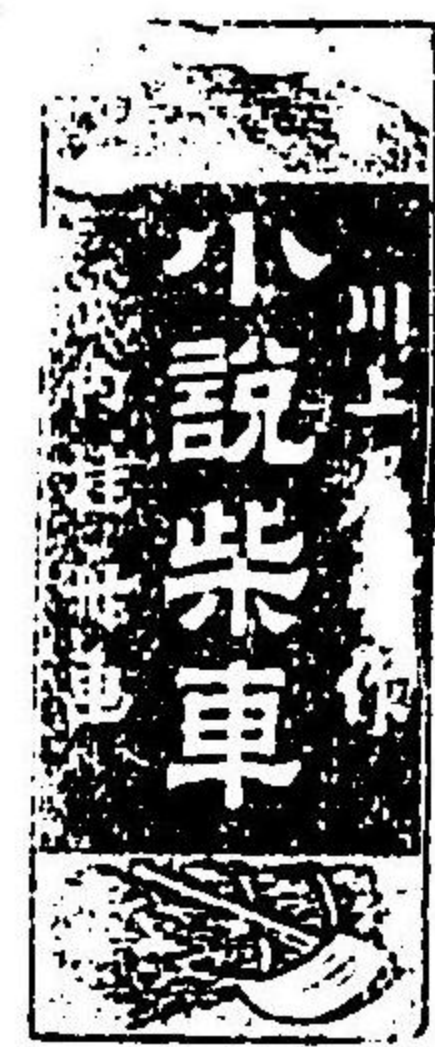
三其内之目書説小堂陽春京東

 新編 櫻痴新編 額四段書目五廿金	 櫻痴新編 額四段書目廿金	 山口朝園 山崎奇談 額八段書目五廿金	 櫻痴新編 額六段書目五廿金	 櫻痴新編 額四段書目五廿金
 櫻痴新編 額四段書目五廿金	 尾崎紅葉著 片石くほ 額四段書目廿金	 櫻痴新編 額四段書目五廿金	 安田作兵衛 額六段書目廿金	 維新豪傑談 額六段書目廿金
 櫻痴新編 額四段書目二十金	 櫻痴新編 額四段書目十金	 ちの浦浪六著 たそや行燈 額六段書目廿金	 大團圓 額四段書目七廿金三金	 夏小初 額四段書目五廿金
 古今録名 額四段書目十五金	 櫻痴新編 額四段書目七價買第一卷六廿金	 櫻痴新編 額六段書目十三金	 皮譚 額四段書目五廿金	

二其内之目書説小堂陽春京東

 櫻痴新編 額四段書目廿金	 櫻痴新編 額八段書目十五金	 櫻痴新編 額六段書目十六金	 櫻痴新編 額四段書目廿金
 櫻痴新編 額六段書目廿金	 櫻痴新編 額六段書目五廿金	 櫻痴新編 額六段書目廿金	 櫻痴新編 額六段書目廿金
 櫻痴新編 額四段書目廿金	 櫻痴新編 額六段書目廿金	 櫻痴新編 額六段書目五廿金	 櫻痴新編 額四段書目廿金
 櫻痴新編 額六段書目十五金	 櫻痴新編 額六段書目十五金	 櫻痴新編 額四段書目廿金	 櫻痴新編 額六段書目廿金

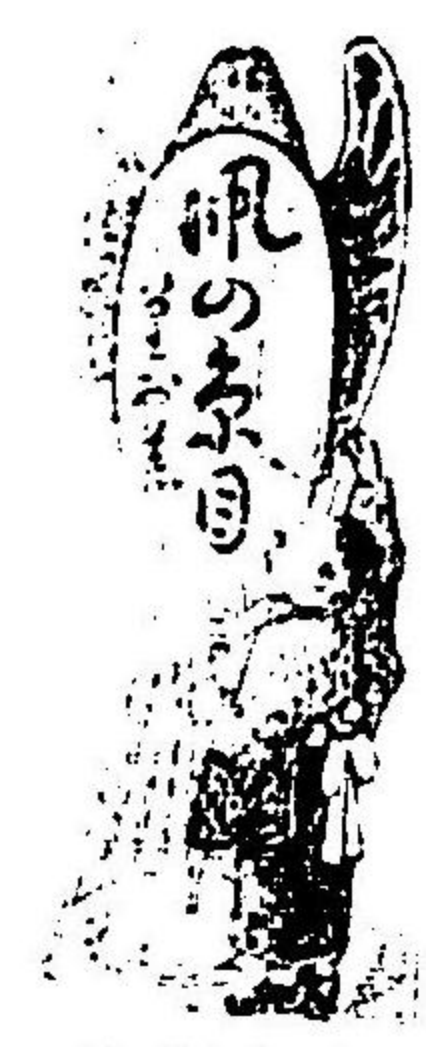
四 其内之目書説小堂陽春京東



新八段郵五冊金



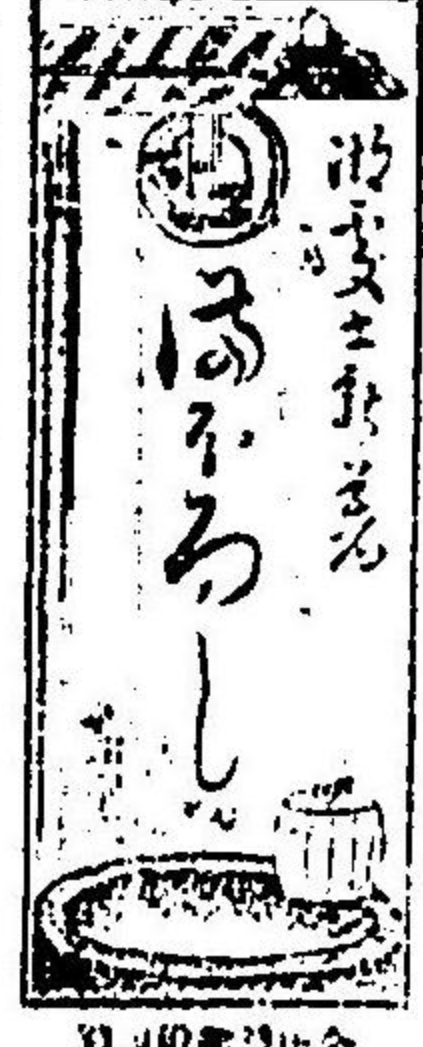
新八段郵五冊金



新八段郵五冊金



新八段郵五冊金



新八段郵五冊金



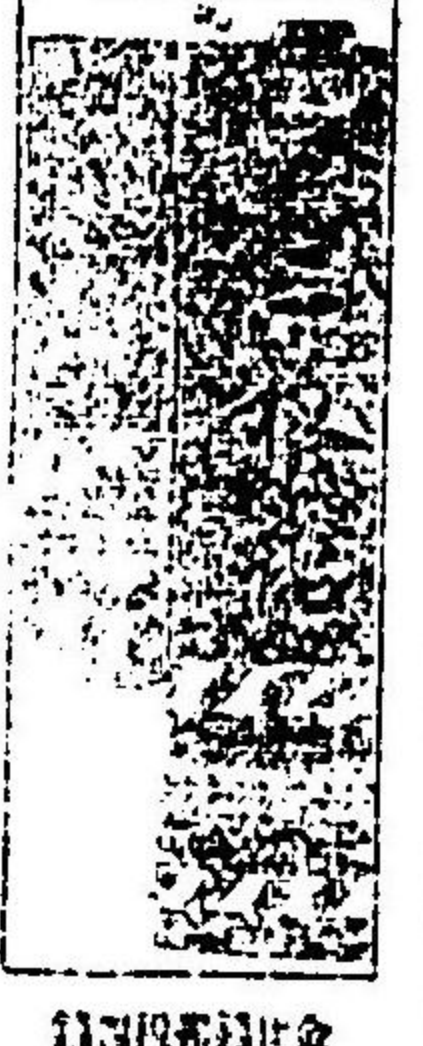
新八段郵五冊金



新八段郵五冊金



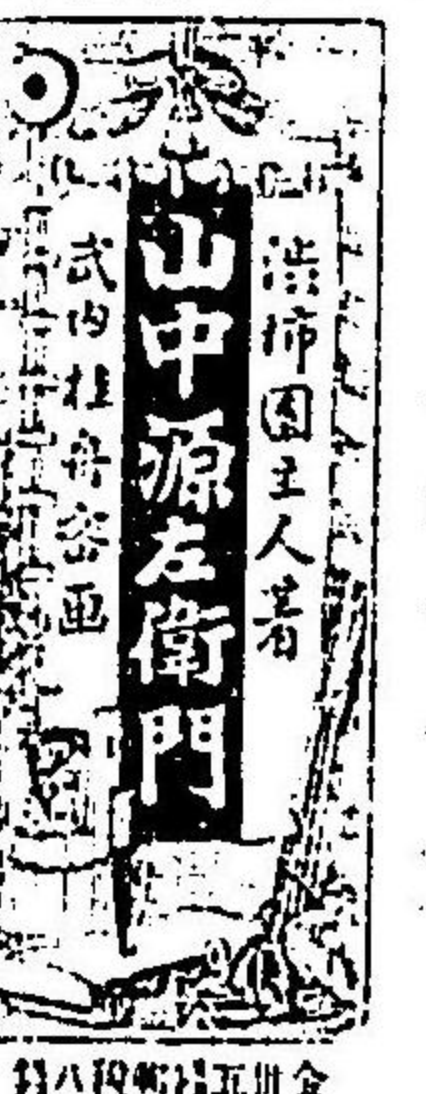
新八段郵五冊金



新八段郵五冊金



新八段郵五冊金



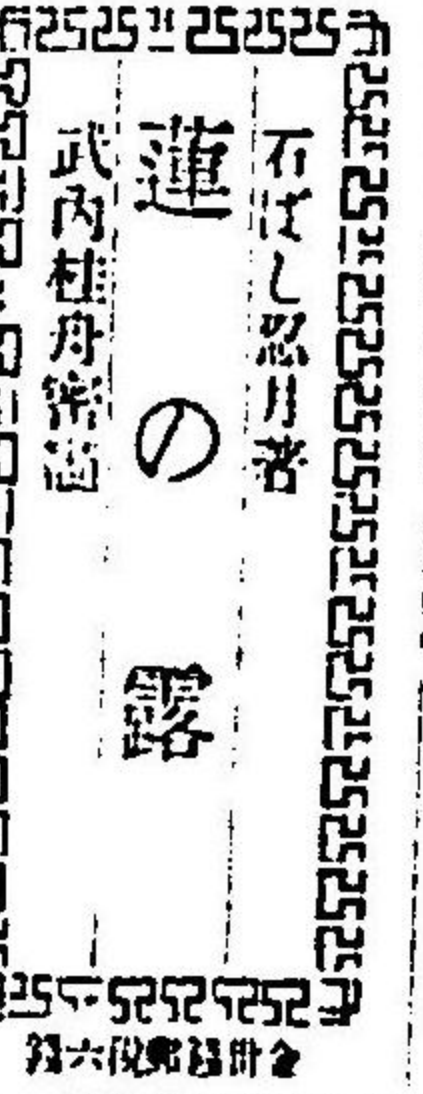
新八段郵五冊金



新八段郵五冊金



新八段郵五冊金



新八段郵五冊金



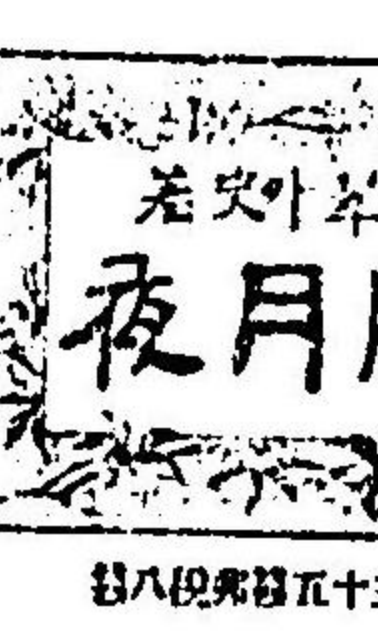
新八段郵五冊金



新八段郵五冊金



新八段郵五冊金

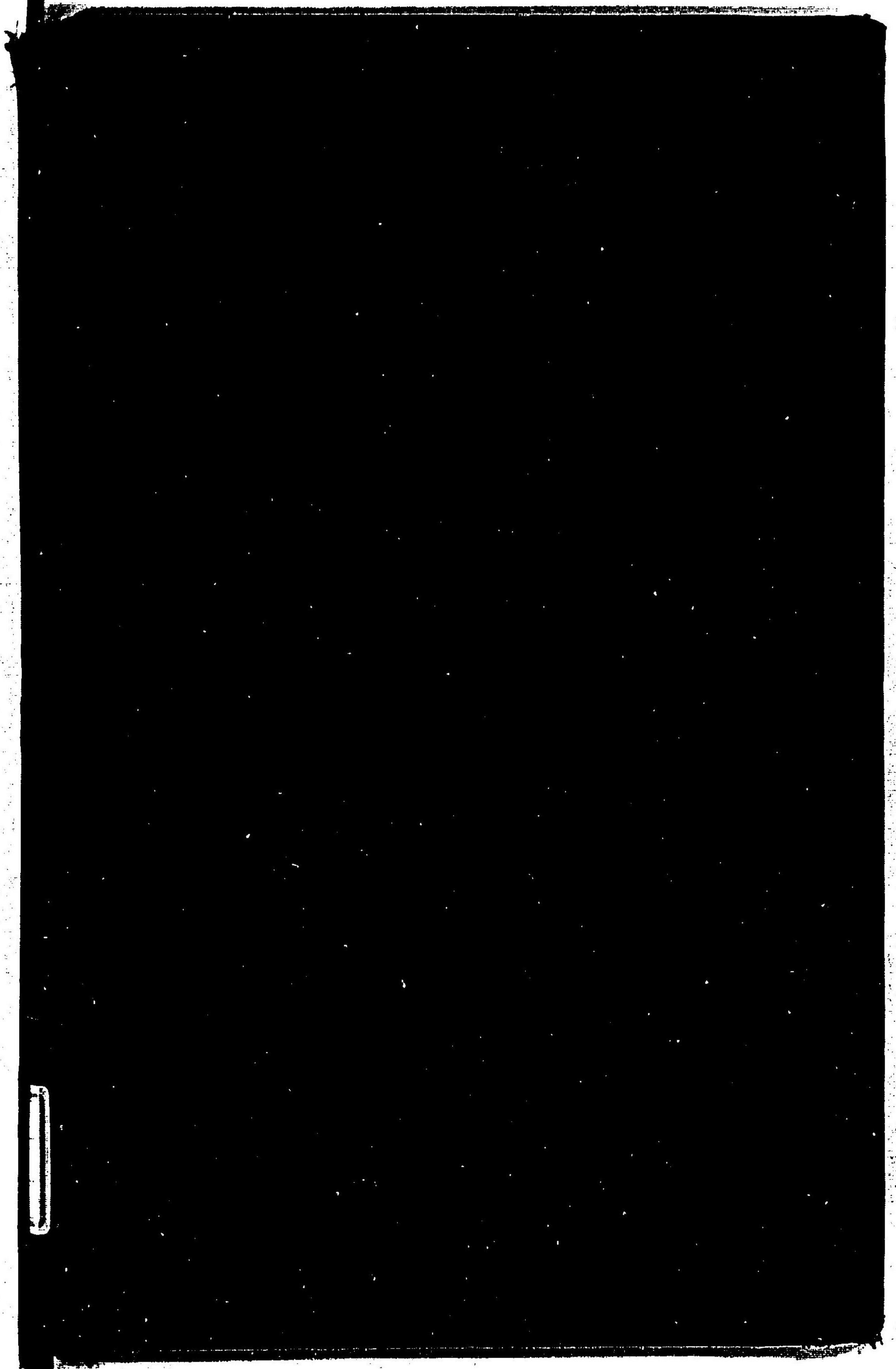


新八段郵五冊金



新八段郵五冊金

45
1773



45

169

088818-000-7

45-169

会津戦争夢日誌

河尻 宝岑/著

M28

DBK-0001



